



TITLE:

人文 第4号

AUTHOR(S):

CITATION:

人文 第4号. 人文 1971, 4: 1-49

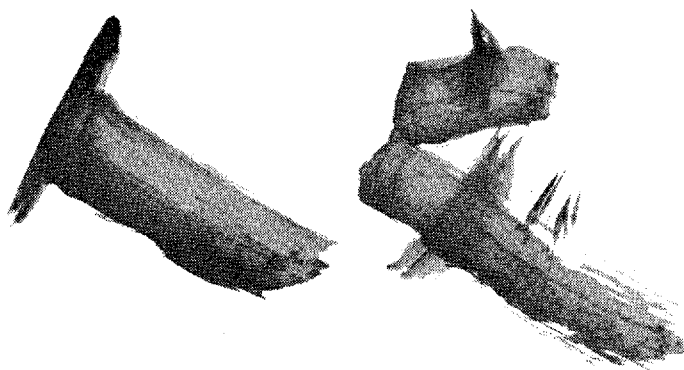
ISSUE DATE:

1971-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57130>

RIGHT:

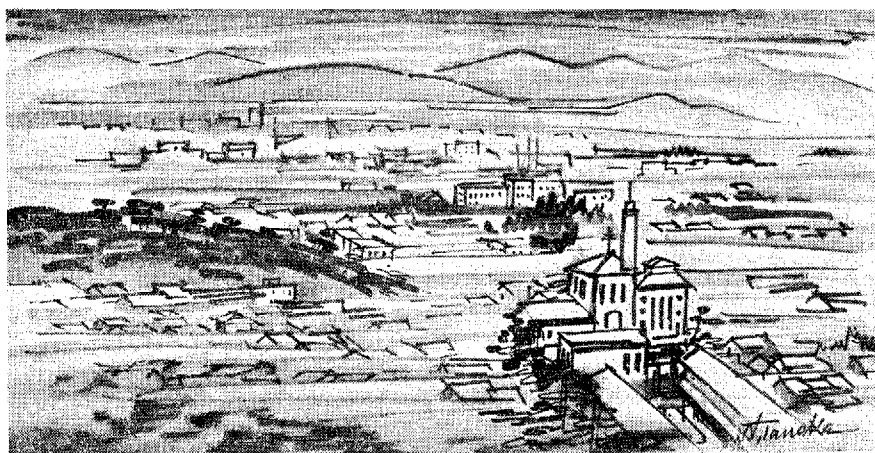


第 四 号



1 9 7 1

京都大学人文科学研究所



人 文 第 四 号 1971年 6月—10月

も く じ

わたしの考え

私は思う

井上 清

講演

夏期講座

民芸の発見

熊倉 功夫

中国の文芸と思想

荒井 健

近代法思想の社会像

樺山 紘一

日本ファシズムについて

古屋 哲夫

仏教における心の哲学

荒牧 典俊

神と国家

上山 春平

招待講演

ヨーロッパの形成（ヘルベルト・ヘルビック）

13

ニーダム博士と中国科学技術史

書評

多田道太郎『管理社会の影—複数の思想—』（荒井）／西順蔵・島田虔次編『清末民初政治評論集』（阪上）／牧田諭亮『五代宗敎史研究』（望月）／ウイリアム・ワトソン著・永田英正訳『中国古代文明』（桑山）／福永光司『芸術論集』（熊倉）／飯沼二郎『日本農業技術論』（樋口）／藤枝晃『文字の文化史』（上山）／フオセ・ル著・樋口謹一訳『社会主義契約論』（山田）

16

共同研究のうごき

別して一端をなす／比較文明論の旅／経済史データ・ライブラリーの構想／国外との交流／文化大革命中出土文物／わが化政文化論

26

研究ノート

政治文化の国際比較

三宅 一 郎

中国現代作家の経歴調べ

寛 文 生

33

旅だより

沖縄を旅して（井上清）／アメリカで聞いた演奏家たち（内井惣七）／ウイーン・チロル・パリ（河野健二）／ロンドンからの便り（藤枝晃）／みじかい旅の感想（吉田光邦）

36

書いたもの一覽（一九七一年六月—十月）

人のうごき

カット・田中重雄奏、山正進

44

私は思う

井 上 清

『人文』編集委員から、第四号に「私は思う」という題で書け、と命ぜられてから一カ月たった。

「私は、べつだん『思う』ことがないから、何も書けない」と、抵抗に抵抗を重ねたが、とにかく、今度はお前の番だから書けという。何も思うことはない、などということはあるまい。たとえばお前がいまとくんでいる日本帝国主義の研究に関連することでも、何か思うことがあるだろう、と編集委員さんは教えてくれるのだが、私が何か「思おう」とすれば、「思われる」ことの方から、先手をうってにげ出して行くようである。

今日も今日とて、委員さんから、「明日、最後の編集委員会をひらくから、明日午後一時までに、書いておいてもらいたい」と、ごもっともな催促をうけて、私は頭をかかえこんでいた。それこそ「思い」あぐねて夜の十時すぎ、何の気なしにテレビのスイッチをいれたら、自民党の保利幹事長が、何かしゃべっている。何事ならんとみていると、今日午後、衆議院の沖縄特別委員会で、自民党が強行採決をしたというので、その問題をめぐって与野党幹事長・書記長の討論会がお

こなわれている。

これでやっと私もひとつ「思う」ことができた。国会の強行採決には、私たちはもうさんざんなれっこになっている。強行採決のたびごとに、野党は議会制民主主義の危機をさげお。新聞の論説も、いっせいに、「遺憾」だといい、政府、与党の責任を七分あるいは六分、野党にもいけないうところがあるとして、三分ないし四分の責任を問う。「有識者」たちも、各新聞の社説ににたような談話を発表する。投書欄にも、同じような投稿がいくつが出る。かくて、政府・与党も野党も有識者たちも「大衆」も、一致して、議会制民主主義をまもりましょう、という誓いを新たに、めでたしめでたしのうちに、「強行採決」の結果は生きていく。

そこで私の「思う」番がくるのだが、いったい、わが国には、議会制民主主義が、これまで一時期でもあったのだろうか。

旧憲法下の政治体制が、議会制民主主義であったとは、まさかいない。旧憲法では主権が国民になかったのだから。現行憲法になっても、憲法の条文はどう

あれ、一九五二年四月二八日までの占領下においては、占領軍が日本を支配していたのだから、日本国民の民主主義があったというわけにはいかない。じつさい、占領下では、政府が国会に予算案や法律案を提出するにも、その前にまず占領軍総司令部GHQの承認を得ておかねばならなかった。議会がその予算案や法律案の修正をするにも、あるいは議員が法律案を提案するにも、やはりその前にGHQの承認をうけておかねばならなかった。つまり、国会はいくらか日本国民の民意を反映することができににしても、とうてい「民主」の制度ではなかった。

講和条約が発効し、占領軍という日本国憲法を超越した絶対的権力が、法律上は存在しなくなっているから、主権在民の憲法下で、国会が名実ともに、国権の最高機関として機能するはずであった。しかし、じつさいは、たとえば予算案の編成に当たっては、まず日本駐留軍経費の日本が分担金額を、アメリカと相談して決定しておかねばならず、議会がその金額を自由に修正することもできなかった。つまり政府も国会もアメリカに制約されていた。この防衛分担金制度が廃止されるのは、五九年度からであった。

それでは、その後は国会は真に国権の最高機関となり、議会制民主主義が貫徹されるようになったか？ 答えは「ノー」である。六〇年五月一九日の、衆議院における新安保条約批准の強行採決の記憶は、まだなまましい。そのとき、議会制民主主義らしきものは、それまで、もし、あったとしても、したたかにうちの

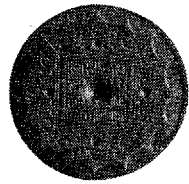
めされ、殺されたのだ。

いや、じつはそれ以前にすでに、アメリカとの関係は別としても、議会は空洞化されていた。一九五四年六月三日、政府・与党は第一九国会の三度目の会期延長を強行するために、衆議院議長の権限で警察官二百名を国会に導入し、本会議場内までも数名の警官を入れ、警官隊の物理的実力、つまり暴力で、議長の本会議場入場を阻止しようとする野党議員を排除した。そして、議長は警官隊に守られて、議場の入口で何かさげんだ。それが会期延長の宣告であったとして、延長は成立したと、政府・与党はいい、つまりはそれをおし通した。「乱闘国会」とさわがれたのは、このときのことである。

これ以来、政府・与党がどうしても通したい議案があると、警官を導入して反対党を排除したり、そこまではしなくても、だまし打ち、抜き打ちの強行採決をすることは、議会運営の型になってしまった。そして近年はそれがますますひんぱんにくり返されるようになった。

これはつまり、日本帝国主義という反動と暴力の支配の復活の一つのあらわれである。そしてこの段階では、すべては実力できまるのだ、ということ、政府・与党が先頭に立って、人民大衆にくり返しくり返し教えこんでいるわけである。この教えを、血の気が多く、感受性のするどい学生が、まっさきにとくと学びとるのは、当たり前だと「私は思う」。

講演



夏期講座

(昭和四十六年度)

民芸の発見

熊倉 功 夫

八月一日—三日
於 本館ロビー

民芸の父、柳宗悦逝つてすでに十年。その独創的な思想を回顧し、あわせて二、三の私見をもつてこれに註したい。

柳宗悦は青年時代を学習院にすごし、ついで『白樺』の同人としてその発刊に参加した。彼の思想形成におおきな影響を与えた『白樺』同人が美術において後期印象派を、文学において自我の文学を移入し、あ

るいは確立せんとしたのにたいし、しかし柳の志向するものは少しく異っていたごとくにみえる。すなわち、柳のもっともおおきな影響をうけたのは宗教的神秘主義を提唱し、かつイギリスの前期アール・ヌーヴオーの鼻祖ウィリアム・ブレイクであり、柳の進んだ道は近代合理主義的解釈に抗する宗教者としてのそれであった。

柳の美術愛玩の念は若い時からの癖であったが、これを著しく強めたのは朝鮮の美である。大正五年渡鮮した柳が石仏寺をはじめ多くのよき朝鮮の美に触れたことは、さらにその創造者である朝鮮の民衆にたいする深い愛情を生んだ。ところが彼の素朴な愛情を一举に思想にまで高める事件が起る。大正八年三月一日の万歳事件である。全朝鮮に広がった独立運動者とこれを殺戮する日本軍隊の衝突は莫大な朝鮮の血を流した。この日本の仕打に憤激した柳が早速、新聞に寄せた朝鮮民衆を弁護する一文は、いわゆる大正デモクラシーの風潮のなかでも特筆すべき発言であった。柳はこれらの文を集めて『朝鮮とその美術』(大正十一)を出版するが、この書は柳の美に関する最初の著書であり、また美と民衆のかかわりを示唆するものとして柳の民芸論の出発となるものである。

だがここには民芸の語はない。柳が民衆的工芸より

民芸の語を造ったのは大正末年のことである。ここにもイギリスの社会主義的工芸家モリスの影響を考えねばならない。その主唱する工芸理論は柳の民芸論の一つの柱であった。柳の創始した民芸の思想は要約すれば民衆の手工芸とよき材料により、しかも多量にして安い民衆のための雑器であり、単純にしてその性格は「用」である。しかもその作行は無心の作にして宗教の協力の賜であらねばならぬ。従来美学が「何が美しいか」「何故美しいか」という議論に終始していたのにたいし、柳の主張が「美しいものを作るにはどうしたらよいか」「美しい民芸で世を満さねばならぬ」という美の運動に高められている点に一つの特長があった。

民芸の思想をかえりみて、白樺派、人道主義、農本主義等々の同時代の思潮との関わりを指摘し得ると同時に、その思想がすこぶるロマンティズムにいらどられたナショナルなものへの傾倒をうかがわせ、しかもそのナショナルリズムは、むしろ明治維新史観、日本近代化に抵抗して、民芸という江戸時代の再評価という限定を自らに課するものであった。民芸の思想の特質はその美的鑑賞態度を含めて、西欧的な発想と日本的なモチーフとの交錯する結び目をときはなつことによって今後明らかにされねばならないだろう。

中国の文芸と思想

荒井 健

中国の書の芸術における、伝統的な批評方法としての次の三つがある（中田勇次郎氏の説による）。

一、品等法。六朝時代の初期、東晉のころ、世評その他何らかの基準によって書家の品格を定めようという試みがすでになされた。それが齊・梁のころには九品に段階づけられるに至る。これは、先秦時代から存在する人物評価に淵源するものである。『論語』（陽貨篇その他）にもその萌芽はあるが、より発展した形式として『漢書』古今人表では、上上から下下の九等に、堯舜から桀紂までを割りつけている。劉宋の虞翻『論書表』、梁の庾肩吾『書品論』、唐の李嗣真『書後品』などがこの系列の書論だが、同じく唐の張懷瓘『書斷』は、六朝以来の書品論の集大成であって、北宋以後はあまり行なわれない。

二、比況法。某の書は……の如し、という表現すなわち比喩によって書ないし書人の特色を示そうとする

方法である。劉宋の王僧虔『論書』、梁の袁昂『古今書評』などがこれに属し、唐時代にもなお用いられたが、やはり北宋になると、過度に「文学的」な表現の欠陥が自覚され（米芾『海岳名言』）、衰退してしまふ。

三、品性法。書のそなえる情性の特色を類型化し、かつその類型を一般的な評価の基準とする。たとえば、呉の皇象の書の特性は「沈着痛快」としてとらえられるが、同時にそれは「沈着痛快」なる類型の成立ともなる。この方法は唐代に至ってようやく定式化された。清の楊景曾『書品』は、書を神韻・古雅等の二十四類型に分かっている。

ところで、以上の三方法は、書ばかりか画にも、そして詩文評のばあいにおいてもまた適用される。梁の鍾嶸『詩品』あるいは唐の司空図『二十四詩品』などは、顕著な例である。このように、中国の書画・芸術と詩文・文学との間には、批評方法の平行現象が存在するが、さらには批評用語においても全く同様な平行現象を見出すことができる。「沈着痛快」の語は書評にも詩評にも用いられる。異なる対象を同一の方法なり用語なりによって截つて行こうとするのは、乱暴なように見える。しかし、さまざまな対象のうちに何等かのパターンを見出し、そのパターンで今度は対象を

分類整理するという、まさに伝統的な中国人の思考方法がここにも働いているのではあるまいか。

中国の文芸批評の裏にあるところの、いまひとつの特色は、人格——より端的には人体に関する語を批評の主要な用語とする、そうした有機的な性格にある。たとえば「氣象」（いちおう、文体印象とみなしてよい）といった語彙なども、古くは『黄帝内経素問』に見え、「人体内の気のありよう」を意味するものだったのである。

近代法思想の社会像

樺 山 紘 一

近代国家の成立する十九世紀に、それぞれの歴史の進展に応じて、ドイツ、フランス、日本に、法思想史上注目される三つの論争がある。ドイツ一般市民法典論争、ナポレオン法典編纂に際する議論、日本民法典論争である。この論争をとおして、近代法の原理がいかにして確立されたか、をみたい。

近代法は、ヨーロッパにおいて一般に、封建法の所

有權法理と身分法理を否認し、ドイツ普通法をふくむ
広義の近世的ローマ法を主体とし、自然法的信念のも
とに、資本主義生産の社会的条件のもとで成立する。
市民社会の広汎な成立と、近代的合理主義がそこに関
係している。その近代法の外見上の特性は、しばしば
指摘されるように、公私法の分離という点にある。し
かも市民社会の法として、つねに私法の諸原則が全体
系を規定しており、それ故に、近代法思想の社会像
は、すぐれて私法原理の展開のなかに見られねばなら
ない。

近代私法はその対象を、原則的に人、物、行為の三
者に分割する。人については、人間的存在の自由と独
立、かつ平等なる抽象的個人を措定し、個人の意志を
絶対化する、いわゆる法主体性と私的自治の原則をた
てる。物については私的所有の権利として現われる。
権利の体系であるから、それは受益範囲を明確に規定
し、封建的なゲヴェーレの体系を認めない。行為と
は、法律行為の相互交換性、および手続としての契約
関係のことであり、つねに具体的諸様相を捨象した論
理的演算の可能な形で現われる。フランス民法は、こ
の近代私法の諸原則を自然法に従って、不動の出発点
におき、人、物、行為の諸項目についてすぐれた法体
系を築いた。ただし、人の領域における家族の問題は、

日本における場合と似て、錯綜している。

ドイツ一般法典論争における立役者、ザヴィニー
は、従来しばしばその保守性が指摘されてきたが、し
かし私法原則についてのかれの見解は、きわめて近代
法的であり、ドイツ歴史法学派の研究は、今後この点
からすすめられねばならないのではないか。

明治二十年代における明治民法制定についても、こ
れまで専ら保守派の圧力と、ことに家族制度について
民法理念の著しい反近代性とは云々されてきた。しか
し明治三十一年施行の民法典は形式上はドイツパンデ
クテン法式であり、權威主義、專制主義的に見えるも
のの、内容的にはボワソナード以来のフランス民法的
性格が強い。そればかりでなく、編纂期以後、民法典
の責任者である穂積陳重、梅謙次郎らの法学者の近代
私法についての見解は、これまでの定説と大きく異な
ることを認めねばなるまい。

明治民法を担った民法学者たちが、公法学的には逆
にかなりに權威主義であったことは、ザヴィニーにし
ても、またナポレオン法典に関係した法学者たちにし
ても軌を同じくする。この逆説を、法思想史上、いか
に説明するか、という点に今後の課題がある。それ
が、私法の優先を説く近代法体系の特質であるのか、
あるいは政治的につねに保守化する法学者身分にその

理由を求めるのか、あるいはまた、ドイツ、フランス、日本のそれぞれの法社会の現実の中に、未だ明らかにされていない秘密があるのか。近代思想史研究についての提言は多い。

日本ファシズムについて

古屋 哲夫

日本ファシズムは、ドイツにおけるヒトラーのようなか核を欠いており、複数の勢力の相互作用の中から形成されてきたものであった。まづ第一にその起点となったのは、云うまでもなく北一輝の「日本改造法案」であるが、それがファシズム運動の起動力となりえたのは、そこに掲げられた個々の改造条項によるのではなく、天皇と国民の合体によるクーデターという構想と、その国家改造によって「開戦ノ積極的権利」を行使できるような「正義」が獲得されるとする主張とにあった。そしてその「天皇と国民の合体」は、やがて青年将校たちによって、国民の側の強烈な天皇信仰により国民は天皇の分身となり、天皇はそれに感應

するという宗教的とも云える関係として把握られ、いわゆる「昭和維新」の運動が展開されることとなるのであった。また、国家改造と開戦権を不可分のものとする思想は、国家総動員体制の確立を志向する軍部の中にその支持者を見出していった。

第一次大戦とロシア革命ののち、軍部の中には、次の戦争はより大規模な総力戦となる外はなく、その場合、思想的な敵に対しても充分な警戒を必要とするという認識をもつグループが生れ、彼等は昭和初年には、軍全体を動かし得るまでに勢力を拡大しつつあった。そして、中国国民革命の進展による満権益の危機・国内支配層の腐敗・恐慌による大衆の疲弊というイメージから、満州侵略による新たな植民地支配と国内改造とを結合した総力戦体制の確立が構想されることになる。

満州事変の時点では、北を起点とする勢力と軍の中核勢力とが抱合するかにみえた。北系の青年将校の一人大岸頼好が、「一切ヲ挙ゲテ天皇へ、一切ヲ挙ゲテ国家総動員へ」という二つのスローガンに自己の主張を要約したことは、この状況を象徴するものであった。

しかしこの二つのスローガンは原理的に統一しえないものであった。天皇との信仰的合体による両者の統

一を求めて蹶起した青年将校たちは、現実の天皇に弾圧されてその幻想性を暴露した。「一切ヲ挙ゲテ天皇ヘ」という方向は、総力戦のための国家の組織・運営の原理を生み出すものでない以上、国民の自立性を解体して戦争のための人的資源と化するという側面にその作用を局限してはじめて国家総動員の要請と両立し得るものであった。そして、そのようなものとして、官僚主導のファッショ的国民組織化運動が、上述の動向と呼応しながらも、別の次元で進行していたのである。

それはいわば、治安維持法体制の強化を縦軸とし、在郷軍人会、青年団、壮年団、教化運動、農村更生運動、国体明徴運動、国民精神総動員運動など、つまり国民の不満や疎外感を天皇崇拜と共同体意識の復活、或いは創出によって組織化しようとする運動を横軸に積み重ねるという形で進められた。既成政党も、浜口内閣では教化総動員運動によってこの流れの利用を企てるのであるが、やがて自らの主体性を捨ててこの方向になだれ込んで行った。

他方、軍主流も、クーデターによる国家改造方式を切り捨てて、このような形の国民組織を総力戦体制の基礎とした以上、既存勢力の国民組織化における指導性を承認し、これと妥協せざるをえなかった。そして

その結果、国民組織をめぐる発言権を求めて大政翼賛会にうごめく既成リーダー達の上に、一面では独裁的な力を振いながら、反面では一元的な政治指導を確立する起動力を失った戦争指導者が形成されてゆくことになるのである。

仏教における心の哲学

荒 牧 典 俊

あれこれと哲学の書やら仏典を読むうちに、どうやら仏教を、人間の哲学として理解しようとしていたらしい。わかい日のぼくに鉄斎の「釈迦・観音・達磨・孔子・老子同舟図」は、そうゆう人間の哲学の夢をうえつけてくれた。爾来、遅遅としてすすまぬ道を歩みながらも、やはりおそらくは仏教こそ、さまざまな人間の哲学のうちでも、もっとも深いものではあるまいかと思う。

いろいろな類型の仏教者たちがいる。悠久のインド文化の伝統の中から生れてきたインドの仏教者たちの類型として、「仏弟子たち」、「説法者たち」、「瑜伽行

者たち」を挙げよう。ひとしく悠久な中国文化の伝統が、漢帝国の崩壊とともに、あたらしい思想・芸術などを創造しはじめたときに、仏教は、そのあたらしい要素として、中国文化に受容れる。そこからかりに「南朝型」、「北朝型」、「隋唐型」とでもいえるような中国仏教者たちの類型が、漸次、成立していく。かれらすべての仏教者たちの人間の哲学に一貫する本質を「心の哲学」としてとらえよう、そうしてインドにおける仏教の展開とそれをつぎつぎに受容する中国における仏教の展開とを、まずは心の哲学の根本構造（のモデル）によって説明してみよう、というのが、かの日の基本の想であつたのだが……………。

心の哲学とは、つぎの二つのテーゼをもつ。曰く、心は、たしかに主体であるけれども、そのままで共同的である。しかもそれが、二重の共同体構造をもつ。すなわちまよいの共同体存在——歴史的存在といつてもよいし、より静的には社会的存在とか体制的存在とかいってもよい——であると同時にさとの共同体存在——永遠と一つなる存在とかあらゆる文化・価値を自由に創造する存在とかいいたい——でもある。

（かくいうとき、ヘルケムの *conscience collective*、またベルグソンの *société close* と *société ouverte* の区別を想起しているのであるが、いかがであらうか。）これ、いわば心のヨコの方向。

つぎに曰く、心は、主体としては二つの共同体存在をつないでいる。これに二つのしかたがある。心が、まよいの共同体存在を否定して、その外にさとの共同体存在を求めるとき、それは、ひさしくなずんできたまよいの存在を否定するための、きびしい実践をとまなう。インドの仏教者たちの苦行は、その例である。これを実践的思惟とよぶ。しかしながら心は、まよいの共同体存在であるままで、それをあらしめる根拠、それを象徴とする真理としてさとの共同体存在を現成させることもできる。おそらくあらゆる文化の起源である宗教儀礼、またそこから展開してくるさまざまな芸術活動は、そういう心のありかたにもとづく。これを象徴的思惟は、いわば心のタテの方向である。仏教者たちの人間の哲学を、かかる心のヨコとタテの構造（のモデル）によって説明してみたい。

「仏弟子たち」は、ああ、あらゆるものはうつろう、無常だ、苦だとまよいの共同体を自覚して、きびしい実践的思惟——禪定を中心とする——に生きた。

「説法者たち」はインド古来の物語文学の伝統をうけて象徴的思惟によってさとの共同体を自覚し、それを、あらゆる衆生・菩薩・仏をあらしめる根源なる真理、空性、真如、法界などにまで深めた。それは礼讃などの宗教儀礼の発達をともなっていたにちがいない。

い。「瑜伽行者たち」は、前者の実践的思惟に後者の象徴的思惟をとり入れて菩薩行の実践体系を生み出し、前者のまよいの共同体の哲学と後者のさとり共同体の哲学を融合させて、仏教の心の哲学を完成した。中国思想は、このモデルによっていえば、もともと象徴的思惟によって、儒教倫理、老荘の道の哲学、ついに魏晉の聖人の哲学——いずれもさとの共同体の構造をもつ——を生み出していった。かかる中国思想の内的展開が、あくことなく仏教を受容していくところから「南朝型」仏教が展開する。それは講經すなわち象徴思惟によって、いかにして聖人（仏）になり得るかを思惟していた。インドの「瑜伽行者たち」の伝統がかなり直接につたわっていた「北朝型」仏教は、よりきびしい実践的思惟によって心を止観せんとしていた。「隋唐型」仏教の根本の特色を馬祖道一の即心は仏にみることができ。かれの止観する心が即ち聖人だというのである。ここに中国仏教の一つの極致があるう。

といたいののであるが、おそらく一生かかっても、これだけを論じつくすことはできない。わかくもないのにどうやら ambitious に過ぎたようだ。

神と国家

上山 春平

講演委員から、夏期講座の題名を問われたとき、ついで何気なしに、「神と国家」と答えてしまった。そのころ、記紀の神話を律令国家の価値体系としてとらえる仕事をすすめていたので、私の念頭にあった「神」は日本神話の神々であり、「国家」は八世紀に成立した律令国家であった。ところが、「神と国家」という題名を口走ったとき、私は、学生時代に改造文庫で拾いよみしたバクレーンの同名の本を思い浮かべていた。この本の内容は、もうすっかり忘れはてていたのだが、タイトルだけが奇妙に頭にこびりついており、そのタイトルと、ツルゲーネフの『処女地』の主人公の姿などが二重うつしになってあらわれてくる。それにまた、『悪霊』の群像がからんだりもする。ともかく奇妙な連想システムをとまなう本なのだ。

それが気になって仕方がないので、この機会に、バクレーンの『神と国家』を読みかえしてみることにし

た。改造文庫本は、どこかにいつてしまつて見つからなかったが、たまたま最近出た「アナキズム叢書」のなかにその本が入っているのを知つて、講演の前日に久しぶりの対面をした。ところが、いきなり、その冒頭に、「ジャコバン党の絶対主義者たちやジャン・ジャック・ルソーとロベスピエール一派の革命家たちが国家の絶対権という恐るべき非人間的理論を高唱するのは、集団的利益とか、集団的権利とか、集団の意志と自由とかいったフィクションの名においてである」という文章を見いだして、度肝をぬかれる思いがした。

ルソーといえば、十八世紀フランスの最も革命的な思想家として、わが西洋部の共同研究のスタートをかざる研究テーマに採用された人物であり、ロベスピエールといえば、ルソーをとり上げた桑原班の一員として、フランス革命にとりくんだときに、革命派の最左翼として敬意を表した人物である。その二人が、国家の権威の擁護者として、バクーニンの槍玉にあげられているなどは、思いも及ばなかった。しかし、そう言われてみれば、思いあたるふしがないでもない。つい最近書いた「ルソーとマルクス」(桑原武夫編『ルソー論集』)という論文のなかで、ルソーの「シトワイヤンの宗教」にふれて、それとロベスピエールが革

命のさなかに主宰した「最高存在の祭典」との類似を指摘したとき、私は彼らの発想のなかに、祖国愛の聖化をめざす一種の国家宗教への傾斜を見ていた。

冒頭の一句をみたとき、私は、「ああ、わかった」と思った。何がどうわかったのかはともかく、おそらく複雑な思想と体験のイメージが、その一句を中心に渦まきはじめて、ともかく、「ああ、わかった」と思ったのだ。それから、何かあらかじめ筋書を知っている芝居でも見るように、予想めいたものをたしかめながら読むといったぐあいであった。むかしの記憶があったわけではない。むかしは何もわかっていなかったのだ。冒頭の一句が、全巻の見通しを与えてくれたのだ。

ただ題名の連想から手にしたバクーニンに、思いがけぬ強い印象をうけたために、講演の当日は、まず、バクーニンの冒頭の一句についての言及からはじまって、ルソーの「シトワイヤンの宗教」に入り、話はフランス革命にまで及んでしまつて、いよいよ記紀の神々と律令国家の問題に入るころには、もう与えられた時間を半分ちかくもつかつていた。そのところを、「比較思想史」という逃げ口上で、何とか取りつくろおうとしてみたものの、脱線がすぎてしまつて、本論に入つたばかりのところまで時間切れになつてしまつ

た。講演としては完全な失敗というほかはない。本論でしゃべろうとしたことは、目下、中央公論社の『歴史と人物』という雑誌に連載中なのであるが、要するに、記紀の神話を、律令国家の国家哲学として見ようとする観点を話したかったのである。その国家哲学が明治以降、国家宗教として、新たな役割を与えられた点などについてもし時間があれば言及してみたかった。

招待講演

ヨーロッパの形成

ヘルベルト・ヘルビック

一九七一年九月一日
於 分館ホール

ヘルビック氏はベルリン自由大学の中世史教授。一九六三年以後五度目の来日に当る。ドイツ（だけでなく西洋諸国一般のことのようであるが）では他の大学

から招聘されて転任すると、俸給も上るが、氏はかつてそのような招聘を受けたとき、それを断って自由大学に留まる代りに、今後渡日の旅費を大学から支給してもらうことにしたというほどの親日家。来日のたびに京都大学に寄っているが、今回は邦訳のある氏の『ヨーロッパの形成』をめぐってディスカッションをしたいという意向だったので、はじめに氏がその要旨を述べ、あと参加者からの質問に答えるという形で会をもった。

『ヨーロッパの形成』は最近の研究成果も十分に取り入れたヨーロッパ中世史の概論であり、問題は多岐にわたっているが、参加者の関心から質疑応答は次の二点にしばられた。その一つはイスラムの進出による地中海商業の杜絶とヨーロッパの自然経済化に関するピレンヌ学説にかかわる問題であり、他はキリスト教、とくにその定着化と異教的要素の残存の問題。ドイツ法制史を専門にする氏にとって得意とする問題ではなかったのはいささか気の毒であり、またわれわれにとっても満たされぬものが残ったが、とくに後者のような問題についてはヨーロッパの歴史家が一般にどのようなように考えているかを知ることができたといえよう。

（中村賢二郎記）

ニーダム博士と中国科学技術史

一九七一年七月一日、九月二日

於 楽友会館、本館会議室

ジョセフ・ニーダム Joseph Needham 博士といえ、すく『中国科学技術史』"Science and Civilisation in China" I~Ⅵが思いだされる。現在これは第一~四巻および第六巻の大半が出版され、まもなく五巻もでる予定である。全部が完成すれば七巻、ニーダム博士が学界に贈る一大金字塔となるはずである。しかし、六巻以後がなかなか出版されなかった理由の一つには、博士が二期にわたってケンブリッジ大学ゴンヴィル・アンド・キース・カレッジのマスターという忙しい職務にある関係でもあろう。

日本学術振興会の「外国人流動研究員」計画のまねきによって来日したニーダム博士は、七月上旬から九月上旬までの二カ月間、京都を中心に七〇歳とは思われぬ精力的な活躍をされた。京都では、東方学会京都

支部と当研究所共催のもとに、七月一日「Alchemy and Chemistry in East and West」と題する講演、および当研究所主催で九月二日、主として東方向けに「将来の計画とイギリス科学史学界の現状」について談話的講演を行なわれた。前者は『中国科学技術史』第六巻の内容の一部と思われるもので、そのなかで中国と西洋における「錬金術」の展開を対比し、この関連において中国錬金術（化学）のもつ特質とその意味について言及された。このときの講演でもその一端を察することができたように、ニーダム博士の中国科学文明の研究は、いわゆる近代科学、すなわち普遍科学誕生という一大転換点、ヨーロッパにおける科学革命の時期に至るまでの、中国文明圏における科学技術の展開過程と西洋への影響、したがって結果的には、中国科学の普遍科学への寄与のしかたを、さまざまな観点から明らかにすることにあるといえよう。

昨年出版された博士の論文集「The Grand Titration」(London, 1970)は、著者の問題意識と方法論を明示したものである。それは上にのべた中国科学技術史研究の意味を理解する上できわめて大きな示唆を与えてくれる。標題には、化学の容量分析において通常用いられる方法である、タイトレーション Titration「滴定」という表現が見られる。滴定法と

は、ある試料溶液の一定体積中に存在する物質の全量と反応するのに必要な既知濃度の試薬の体積を測定して、その物質を定量する方法である。反応の終点の判定には、試料溶液と標準溶液のあいだの色の変化、指示薬の変色などが利用される。

中国やその他の文化における発明発見の歴史的展開について、ニーダム博士とそのグループはつねにその発明発見の年代決定に努力を払われる。それはいうなれば、滴定法における色の変化、指示薬の変色、すなわち重要なメルクマールの役割を果すからといえよう。大文明をたがいに「滴定して」、信頼すべき事実を見いだし、それが信頼できる根拠がどこにあるかを明らかにする。それをもとにして、社会的・知的なさまざまな構成要素を分析し、窮極的には、前二世紀から十六世紀までは東アジア文明が人間の自然知識を有益な諸目的に適用する上で、西欧のそれよりもはるかに有効であったにもかかわらず、なぜ西洋でガリレオの時代に、近代科学、すなわち自然についての仮説の数学化が流星のように出現し、技術の進歩が約束されることになったのかという大問題に迫ろうとするのである。こうした方法と問題意識を理解した上でなければ、東西の錬金術上の諸発見を比較し、前者がはるかに進んでいたことを明らかにした、このときの講演の

意味を正當に評価することは困難と思われる。

ニーダム博士は『中国科学技術史』の残された部分を完成するための計画については、九月二日の講演で話された。今回の来日の目的の一つは、日本でその協力者を得ることにあった。歴史・社会と科学・技術の相関に重点をおく科学の「外在論者」の博士が、最後の第七巻 “The Social Background” がいかなる結論を行なわれるか、われわれは大きな関心をもって待ち望んでいるのである。

(橋本敬造記)



書 評

多田道太郎『管理社会の影—複数の思想』

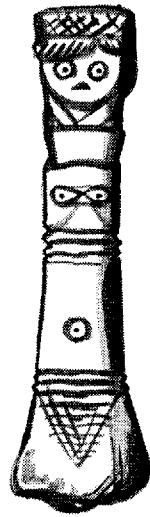
(B6判、三三一頁、読売新聞社)

本書の著者の柔軟にして奔放きわまる技の冴えには、いつもながら感服のほかありません。マンガやらマンザイやら野球やら、目次を見ると大層にぎやかなのですが、「遊び」の精神に徹した内容を予想し、安心してかかる読者がもしあるならば、開巻劈頭、全力投球の大論文にぶつかって見事にキリキリまいさせられること受けあいなので、まあ厄介なしるものといわざるをえません。わたしには今こういう書物を批評する能力も学力も到底ないので、書評者として不適合ですけれども、一、二、感じたことを書いておきます。

日本で本当に都会らしい都会は大阪だけであって、(東京はもはや広すぎる)京

都は大きな田舎町にすぎない——むかし内藤湖南がこうした説をのべているのを読んだ、京都ぎらいのわたしは快哉を叫んだことがありました。同じような考察が本書にもあって(「京都」)、わが意をえたりと思っている、実は京都こそ「高級文化」「発酵」の地であって、「港町などでは文明は発展しても文化は育ちにくい」ことが、「生野菜対漬物」を例として見事に説明されてあり(「二元論的日本空間」)、生野菜の方が何となく高級だと信じこんでいた自分は、宜なるかな、横須賀生れの神戸育ちであったわい、と苦笑した次第です。

著者は文化現象についての俗見をさりげなくかつ手際よく覆して行きますが、「する」スポーツと「見る」スポーツについても卓見が提出されます——本来は「スポーツ気分」を味わっておるべきはずのプロ野球選手たちから「スポーツの感覚と快楽とを」「筋肉的ではなく、気分的に盗み」とっている見物人の行為こそ、近代的な能力主義スポーツから疎外された大衆の「神の復讐に近い」(「スポーツ気分の成立と崩壊」)。ただ、ひとつ疑問が残るのですが。バレーボールの、例の回転レシーブ、あれなど「遊び」としてのスポーツにおける「眩暈」の感覚(「ホイジンガからカイヨウヘ」)を典型的に示すもので、野球ならばきつと、野手のスライディングキャッチあるいは一回転しての捕球がこれに当る。ところで、山田慶児氏の指摘どおり、「遊び」の四カテゴリーのうち、たゞ「眩暈」のみが実践を要求し、「代行」がききません。とすると、野球のあらゆる醍醐味を選手に「代行」さ



せることによってぬすみ尽すのは、果して可能なのでしょうか。

本書に対する書評のなかで、生活者としての著者が感じられぬようだが……、といったことがべられていました。それは、恐らくは、「あとがき」に「汎として繋がる舟の若く、虚にして敖遊する者なり」という『莊子』のことは引いている著者の態度にもとづくもので、とられなきあまりにも自在な姿勢は、何となく隠者

西順蔵・島田虔次編『清末民国初政治評論集』

(A5判、五五三頁、平凡社)

本書は、長短とりませ多数の政治評論の翻訳からなっている。ここでは「中国思想史上比類まれなる傑作」といわれる、譚嗣同『仁学』について簡単な解説とコメントをおこないたい。

上海、天津に行き西洋科学の驚異を目にした譚嗣同は、しかしながら自己の育った中国の伝統的学問を弊履のように捨てて、西学を採用するという態度はとらない。かれは、はるかに泥臭く強引な仕方、で、伝統

を聯想させえします。

しかしながら、現代社会の文学も芸術もスポーツもマンザイも一視同仁に論じつつ、それらの担い手たる集団の運命と、集団の創り出す未来とに対する強い関心は、本書の至るところに滲みでていますし、真に退嬰的没社会的隠遁者と著者とは、全く性格を異にする存在であること、これまたいうをまたぬところではあります。

(荒井 健)

的学問とその諸概念を解釈しなおし、読み方をかえて新たな状況に立向う。そこには西学を積極的に学び、しかもそのことによって伝統的学問そのものを変革しようとする、知的ラジカリズムが脈打っている。そのさい根本的な役割を果たすのは、仁の概念である。仁概念を明らかにし、それを通じて固定化されたカテゴリー(名)を破るという仕方、で、変革は遂行される。

仁もやはり名である。しかし「仁は天地

万物の源」であり、万物を貫き、統括する、観念的に把握された原理である。人為的に設定された命令や道徳は、破られ、亡びる。けれども万物の統括原理たる仁は、人為が破られることによって存在しつづけ、不生不滅である。仁が乱れるとすれば、名において乱れるにすぎない。これは仁が静止状態だということを意味するのではない。逆に仁は運動である。

それにたいして名は、権勢や習俗に左右される。たとえば淫という名は習慣的に悪とされてきた。しかしもし人類の最初期に淫を国家の正式な儀礼とする習慣が立てられていたなら、淫は悪とはされるまい、といった具合である。人為的で相対的にすぎぬ名が固定化されるとき、名は網羅となる。網羅を破ることが、仁学の目標である。「名を悪むことを知れば、仁学はほとんど無用のものとなる。」

仁と名とがこのように解されるとき、仁という概念の規定に根本的変化が起っているようにわたしには思える。仁は名であるが、同時に人為としての名から解放されて万物の普遍的統括原理となる。かれがあげる実例が示すように、仁は百物のメカニズ

ムであり、したがって諸学によって認識可能なものになる。こうした変化は、名にとられた伝統的学問の自己否定と見る事ができる。伝統的学問の変革は、名の徹底的否定という業火をくぐってはじめて可能となったのであろう。

仁の第一義は通である。通とは差別や障害を除去して通じあうことであり、平等と世界主義（小島祐馬）がそこからでくる。国交と通商とが主張される。ここで興味深いのは、かれの儉（約）論である。儉も奢も相対的区別にすぎず、儉の尊重は名に囚われた態度だという。さらに儉は、財貨の生産と流通を妨げ、人民を貧困に追いやる。儉は不通である。奢は弊害を伴なうとはいえず、生産と流通に関しては儉とは比較にならないほどの利益をもたらすという。

奢侈論は、一八世紀ヨーロッパの思想上の一点である。奢侈は不平等と生産力とに関係づけられる。奢侈は経済的不平等に基づくが、同時に一般的富裕（必要品生産）を基礎とし、しかも貧民に仕事を与えることで富裕の一般化に寄与するという主張（マンデヴィル、モンテスキューなど）。奢侈は大多数の人々の貧困によってのみ可

能であり、奢侈品生産は貧民から必需品を奪う方向で働くとする主張（ルソー）。ある種の生産力の視点に立つ前者と道徳主義的傾斜をもつ生産関係の視点に立つ後者との拮抗が、この時期の思想史を彩っている。

譚の説は、前者に近いと思われるが、譚においては、奢侈品と必需品ではなくて奢と儉とが対立させられている点に微妙な差異がある。つまり奢と儉との対立においては、富の蓄積はすでに前提されており、その用い方だけが問題とされるから、一般的富裕（経済的平等）の問題は理論の上では

浮びあがってこないように思われる。

知的ラジカリズムによって伝統的学問の変革をもたらした譚嗣同は、「各国の変法は、流血よりして成らざるものなし」として、行動的ラジカリズムに殉じた。真摯な思想家の生涯というべきであろうか。

最後に不勉強を棚上げして希望をいえば、註釈と解説に今少しの親切さがほしいと思う。基本概念の解説があれば、わたしのような門外漢にも通じやすかったであろう。それにしても中国と日本との距離を否応なしに感じさせられた。（阪上孝）

牧田諦亮編著『五代宗教史研究』

（A5判、二八六十四頁。平楽寺書店）

五代と言えは「仏教史の面でも学解を主とした仏教はすたれ、禪宗や民俗仏教が地方へ浸透していった」時期である。そこで著者は仏教史研究には欠くことの出来ない基礎的な作業としての資料を集め、まとめられたのがこの書物の前半を占める「年表篇」である。後半の「論攷篇」は「五代仏教史研究の発端として欠かすことの出来ない

い」論文と、説話を再認識させる論文がおさめられている。これは一見まとまりのないようにも思えるが資料↓概説↓研究方法を論ずる書物としての一貫性は一応備えている。

年表篇は五代期（九〇七〜九五九）の諸資料に見えた仏教及び道教に関する記事を年代順に列挙する。資料は「従来のような

仏教側の資料にかたよったり、単なる思いつきや恣意的な文章だけではなく、根本的な資料を搜集すること」を意図されたのであって、正史、冊府元龜のみならず隨筆、金石の類から敦煌文書にまで及んでいる。

もっとも金石に関しては題のみにとどまるものが大半であり、敦煌文書も余り効果的とは云えないくらいがある。又引用資料のちじめ方についても、ところどころに問題がないでもない。しかしこの年表篇を読むことにより、五代仏教の概要を理解出来るところに価値があるのであり、これだけの資料収集に対する著者の絶えざる熱意は大いに認めるべきである。但し、納得のいかないのは、題目に五代宗教史研究と掲げてあるにしては仏教史料がほとんどであり、道教資料がわずかしかなことである。むしろ五代仏教史研究とした方がよいのではなからうか。

後半の論攷篇には牧田諦亮氏の「五代王朝の宗教政策」、藤善真澄氏の「説話よりみた庶民仏教」、それに五代仏教音義書である「行瑠の『内典随函音疏』について」の三篇が含まれる。

牧田氏の論文は「三武一宗の法難」の中

の「一宗」、すなわち後周の世宗の仏教粛正の実情について、年表篇の資料を中心に書かれている。世宗がこれを断行するに至った理由は「従来の廢仏を實行した王朝と同じく、儒教道德を基本倫理とする立場からは仏教は歓迎されない存在であり、一面道教に偏ったために行った廢仏策とは異り、合理的仏教への反省」と見る。又この施策によって国家権力が全てのものに優先し、完全に教団を支配しえるための基盤となつたことに意義を見出す。しかし著者の言う

儒教国家であるから廢仏は当然であるという考え方には疑問を生ずる。というのは著者の論理をさかのばれば、儒教国家である歴代王朝は、絶えず廢仏を行っていなければならないことにもなる。又五代王朝を伝統的儒教国家と規定すること自体問題があるのではなからうか。著者も述べている如く、世宗の強兵策は五代に他に比を見ない程の軍閥王朝である。この軍閥王朝を統制治安するためには、軍資金及び兵力の増大が当然必要となる。従つて、経済状態にいい影響を及ぼさない僧尼を減少させ、生産者を増加させなければならないことになる。この様な点を考えると、儒教国家というよ

りはむしろ軍閥王朝であるからこそ、宗教界の肅正をせまられたと考へても無理はなからう。

藤善氏の論文は説話を資料の中心として「唐末五代における叛乱に果す宗教の役割が如何に大であるかを述べ、叛乱の背景には小共同体の媒体として寺觀及び僧尼、道士らの存在価値」を認めている。これらの説話の中には革命に利用される要素が多分に含まれ、民衆の叛乱に論理的、精神的根拠を与えたと推測する。その理由として、説話が具体性にとみ、社会に深く根差した内容を持つこと。リアリズムを重んずるがため、豊かな説得力を備えていること。単一な説話の中にさえ多種多様な意図が盛りこまれ、複合的な問題意識を認めること。重庄にあえぐ民衆に味方する神や仏が描かれていることなどの諸点を指摘している。そしてこれらの説話が講会や齋会における教化活動の一端として語られたものであると結んでいる。論理の展開には多少の飛躍を感じないでもない。しかしその過程における具体的な資料の提示により、仏教説話の価値は一応認められる。(望月節子)

ウィリアム・ワトソン著、永田英正訳

『中国古代文明』世界古代史双書一〇

(A5判変形、一四二頁、創元社)

イギリス屈指の考古学者スチニアート・ジャレット編集による Library of the Early Civilization という叢書の一冊である Early Civilization in China (ティムズ・アンド・ハドソン、一九六六、一四三、図版一三二、地図三、表一)の訳書である。一九六一年に同社から出版された

The Dawn of Civilization という分厚い書物はその後各章を一冊にして単行本の形をとって、前記の叢書となり再刊された。Early Civilization in China は、その第九章だいたいの“A Cycle in China”と題されていたところである。単行本になったところで、タイトルが変更になり、本文も若干加筆あるいは削除され、挿図はふえ、校正ミスも訂正され、改訂版のおもむきを呈して公刊されたのである。本書の扱う時代はとくに先秦時代で、ややそののちの工芸にふれるところがある。第一章から第五

章にわかれ、“伝説と歴史”、“旧石器時代の中国”、“新石器時代の中国”、“青銅器・初期鉄器の時代”、“商周の芸術的伝統”の順をおく。

The Dawn of Civilization の時から豊富な挿図と、ある章は粗雑ともいうべき記述とをもって、この意味からもティムズ・アンド・ハドソン社の名を高からしめたが、今単行本となって改訂されたとはいえ、この点に関しては旧にならっている。ただカラー図版は比較的鮮明に印刷され、また少くともわたしがこれまでモノクロームでしか知らなかった遺物がカラーで紹介されている。モノクロームの図版は至極出来がわるく、比較的にいいないな解説がある場合でも一般の読者には理解しにくいとおもわれる。それでは記述の内容はどうかというと、これがまた一読して驚かざるをえない。原本(わたくしのみたものは研究所蔵書の平

装本)の裏表紙に明記されているとおり、

「考古学的資料によって先史ならびに初期の王朝の時代を概観」することが目標にされている。その場合わたくしたちが当然期待するのは資料のアップ・トゥ・デイトであるのに、一九六二年出版の『新中国の考古収獲』までの資料がとり入れられているにすぎないし、それまでも脱落している項があった。この点でも旧版から単行本の新版に至る間の資料の増加が生かされていない。第一章の「神話と歴史」は冗長で、一章をもつけるほどでなく、むしろこのように限られた記述のスペースがむだに使われていると思し、新出の資料がとりあげられていないことと裏腹である。いちいち不可解な事実を掲げれば際限がないが、冒頭の一句 “The history of China is in the main the history of a single people, ……” はワトソンの中国史に対する基本的態度らしく、旧版でもその副題に China, the Civilization of a Single People が認められる。まったく驚きである。旧石器時代の章では北京原人の文化が最古であるとする。藍田や匭河の文化を認めないのであるうか。これにまったく言及

していない。新石器時代ももっぱら仰韶文化と崑山文化があるだけで、東アジアの重要な文化のひとつであり、解放後飛躍的に明らかになった華南の稲作文化の位置が示されていない。第四章でもっとも基本的な問題であるはずの殷文化の編年については、その最古が洛達廟期としてとらえられ、すでに一九五九年偃師二里頭で確認されたその第四層の文化は現段階で河南西部の約三

福永光司『芸術論集』

珠王の書一冊。朱紅の装幀に黒字で題して曰く『芸術論集』。叢書中国文明選の第十四巻である。なべて何々が為めに読書することの多い昨今、ひたすら文字を読み、解することの楽しさを満喫させてくれる本書は、まことに希有なる書というべきであろう。本来、「楽は楽なり」というごとく、読書もまた無目的の楽しみと考えるからである。

「楽記」より石濤の「画語録」に至る中国の代表的芸術論、集めて八篇、原文をあげて読み下し、解を付して評する、その行

十余所において関連づけられている殷早期の文化であり、洛達廟期より一時期早い。永田氏による訳文は原文を彷彿とさせるものではほとんど直訳体に近い。そのため一般読者には読みにくいと思うところもある。用語の不統一も若干あるようだが、これは専門家向きの訳書というわけではないのだからとりたてて言うこともあるまい。

(桑山正進)

(B6判、五三四頁、朝日新聞社)

文の深切は本当にありがたい。繙読して、中国芸術観の根柢にあるいわば人格主義ともいうべき主張に私はとらわれた。人格主義と私が呼ぶものは、著者の言葉によれば「芸術の根源に人格性を重視する思想であり、人格性を離れて真の芸術は存在しないとする思想」のこと。そして私のとらわれたことは次の二つのことである。一つは芸術における人格主義の脆さについてであり、その二は、今日の芸術にこの人格主義の示唆するものについてである。

高度の芸術は人格あるいは心境の高さに

おいて得られるとする人格主義は、しかし常に風化し、形骸化する危険性にさらされている。日本の芸道思想などにみえる人格主義は風化した最たるものであるし、家元こそ形骸化した人格主義の典型である。それにしても何故東洋の芸術はこうした危険な人格主義に依らなければならなかったのか。その必然性が私にはよく分らない。むしろ全く逆に考えて、人格主義こそ弱りつつある芸術の最後の依りどころとみるのはあまりにも曲論であろうか。なるほど、芸術論集におさめられた論者はいづれも秀れた芸術家であった。しかしその各々が、その分野において最盛期の作家であったかどうか。作家にとって第一義の仕事は作品である。にもかかわらず、彼等、芸術論の著者が作品において自己表現を完結し得ずに芸術論を書いたのは、いや書かざるを得なかったのは、むしろ最盛期を過ぎ弱りつつある時代の所為というべきである。芸術様式の硬化する時代に遭遇して、古人の作品にたいする憧憬が、古人の人格への思慕として凝固し、これが芸術の革新に繋がることは、歴史に多く見るところである。それ故に私は、人格主義の主張の背景にひそむ

作家の苦衷に心引かれるのである。

人格主義が単なる心がけに終ってしまふ危険性をはらみながら、なお東洋の芸術において不可欠な存在であったことは、早くから人格主義と訣別していたヨーロッパ芸術の混迷をみる時、かえって芸術本来の姿を反省させる。美に限らず、技術も学問もすべて人格主義と絶縁することによって成立する西欧の近代合理主義にたいして、あらゆる人間の行為の前提にその人格を問題にしようとする中国人の態度は真向うから対立する。今日なお、この中国人の姿勢がたとえば手術の成功を祝って毛沢東語録をうちふる中国人医師団の姿のなかに生きているのではないだろうか。一見異様に思える現代中国のこうした光景も、しかし翻えて考えてみるならあまりにも伝統的発想そのものである。近代の合理的精神なるものがいかに脆弱であることか。今日の美の世界が、観るものに伝えるべき内容においていかに稀薄であることか。我々はもはや絶望しているはずではないか。すなわち、芸術は吐露せざるを得ない強烈な感動に発し、観るものに伝えるべきものの重さにその表現は従うはずである。東洋芸術の人格

主義とは正しくここを衝いたもののごとくに思える。「己れの胸中の造化を筆端に吐露すること」、このあまりにも自明の理は錯綜する表現様式に混迷する現代芸術が立

飯沼二郎『日本農業技術論』

学問というものの楽しさをしみじみ感じさせてくれる本である。

その楽しさは、変なたとえで恐縮だが、推理小説を読む楽しさである。とくにそれを感じさせるのは（評者の無知のせいかもしれないが）、日本と中国とで鋤と鋤・鉏との用字法が逆転した原因の究明（一三八頁以下）、古代の華南の農具「鐻」の正体の探索（一二二頁以下）などである。

飯沼名探偵による日本農業技術精査は、時間的・空間的に実に広汎な範囲におよぶ。まさに、わが人文科研で研究する強みを十分に発揮したものと言えよう。かくて、古今東西から集められた「手がかり」を、飯沼さんはひとつひとつ検討していく。

検討の進めかたは手がたい。殷の「耒」と周の「耜」について、天野元之助説と関

ち戻る場ではないのか。『芸術論集』を読んだの断想片々。著者福永先生に御教示頂きたいことばかりである。（熊倉功夫）

（A5判、二五五頁、未来社）

野雄説とが対立しているが、どちらがシロ、どちらがクロとも断定しがたいため、飯沼さんは軍配をあげようとはしない（六九頁以下）。これにたいして、正倉院所蔵の「子日手辛鋤」が鋤か犁かについての鐻方貞亮説と田中作治郎説とのばあい、熟考のすえ後者に分があるとしている（一五三頁以下）。こうした例でも、検討の手がたきには十分に察せられよう。

これまであげた例からも分かるように、この『日本農業技術論』は技術史的方法によっている。一見「日本農業技術史論」とするほうが適切とも思われるほどだが、飯沼さんの技術論は、「日本農業の将来性は、けっきょく、過去から現在にむかって発展してきたその方向を、そのまま将来にむかって伸ばした延長線上にしか、ありえな

い」との信念(九頁)をふまえたものなのである。

過去から現在の発展の詳細は、直接読んでいただくことをおすすめすることにして、飯沼さんが、日本農業の将来性をいかなる方向に見いだしておられるかについてはふれておかねばなるまい。それは、「休閒農業(とくにアメリカ農業)」において、今日までに到達された農業機械化の成果」を、「中耕農業(とくに日本農業)」に「ふさわしいものに作りかえ」て、「休閒農業におけるように労働の粗放化に基づく経営規模の拡大ではなしに、むしろ同一の経営規模の内において、ますます労働集約化の方向におすすめていく」ことである(二五二頁以下)。

こうした将来が日本の農業にひらかれるがためには、飯沼さん言うように、「それにふさわしい新しい農村社会が生み出されねばならない」(二五三頁)。だが、「そのような社会の問題は、本書の主題ではない。わたしは、日本農業の技術的特性をあきらかにすることに、本書の課題を限定」(一二頁)する、という意識的禁欲の姿勢が貫かれている。

さきのたとえに帰るならば、「犯人」割り出しの最後の詰めはここでは行われていない。技術でなく社会構造にかかわっての「手がかり」は、必要最小限の言及や(たとえば一二五頁以下、二二六頁以下、一五七頁以下、一七〇頁以下、一八二頁以下、二〇九頁以下、二二六頁以下)、別に書かれた「農政批判」の所論に徴するほかはないが、飯沼さんが、新しい農業技術ないし「農法(農作業体系)」とこれにふさわ

藤枝 晃『文字の文化史』

紙の上に墨で字を書くだけの、ただの習字には飽き飽きしていたのか、習っても習っても、お手本より好い字が書けないので厭気がさしていたのか、はっきりした理由は知らないが、……………

これは、私が著者を評したことばではなく、著者が十四世紀の隣国の文人たちの篆刻ブームを評したことばです。それが、なんとなく、篆刻に親しむ著者の姿をほうふつたらしむるあたりに、この本の親しみぶかい持味があるように思われます。

しい新しい農村社会との総合的ヴィジョンを、私たちのまえに展開して下さる目を刮目して待ちたいと思う。

最後に蛇足になるが、農業技術が工業技術以上に「技術の全戦線」においてもつ重要性については、星野芳郎氏の「工学万能思想の破産」(『朝日ジャーナル』九月二〇日号)に教えられるところが大きかったことを付記しておきたい。(樋口謙一)

(B6判、二八〇頁、岩波書店)

この本は、文字をテーマにとり上げているのですが、主たる対象は漢字にしぼられています。それは、漢字の歴史に坎んする研究と言ってよいでしょう。しかし、それは、漢字を美学や意味論の観点からとらえた歴史ではなく、何といったらよいのか、私流に言わせてもらえば、マチエル論の観点からとらえた歴史とでも言えばよいのでしょうか。あるいは、文字考古学の観点から、と言った方がよいのかも知れません。ともかく、文字という、人類文化の発展

の鍵であり、今となつては自滅を促進する鍵ではなかったのかとも言いたくなる、この珍奇にして靈妙なるものを、意味とか美とかいったメンタル・プロセスの側からではなく、それがメンタル・プロセスの側に飛び移る一手手前のところで、物としての姿において取りおさえる、というのが、この著者の前人未踏の、と浅学の私が勝手に考えている、仕事なのではないでしょうか。百枚以上の豊富な挿図用写真のほとんどが著者の手になるということが、「あとがき」にかかれています。それは、「お習字に飽き飽き」して、つい、というような、みちくさのたぐいではなく、マチエル論の観点をつらぬくための方法意識にもとづく、不可避の作業であつたことが、この本を読み進むうちにはつきりしてまいります。著者は、そのところを、ダメおしするように、「写真を研究材料として重く見ることは、卜辞を甲骨に、金文を銅器に、それぞれ密着させる方法だと信ずる」と書いています。

三〇〇ページたらずのこの本に、一〇〇枚以上の写真が入っているわけですから、ほとんど二、三ページおきに写真があらわ

れるのですが、その写真の一枚一枚に、著者の深い愛情がこもっています。その一枚一枚に、納得のゆくまで時間をかけたに相違ありません。著者の方法的観点に最もふさわしい姿で対象を定着させるために、篆刻の制作におとらぬほどの精神が傾けられたにちがいないと私には感じられるのです。とかく物の研究に縁のうすくなりがちな文獻本位の研究者たちには、こういったたぐいの仕事は、好事家の手なぐさみとみられやすいのですが、この本でやられていたような仕事は、たんなる好事家にはゼッタイに手に負えないたちのもののように思わ

フォセール著・樋口謹一訳

『社会主義契約論』

この本がフランスの左翼にとってある意味をもつであろうということ、一定の条件のもとでは、かなり重要な意味をもつかもしれないということ、さらに、よくこなれた立派な翻訳であることを、わたしは否定しない。にもかかわらず、この本が「翻

れます。著者が自ら、「このようなことへの関心は、私の勤める京都大学人文科学研究所が、まだ東方文化研究所であった時から、貝塚茂樹教授の金文研究や森田三教授の漢簡研究の共同研究に首をつっこみ、また私が敦煌写本の共同研究班を組織して、その間に印刷以前の典籍や、書物にならない書きものをいろいろ扱う内に、先輩や同僚に啓発されて得たところのものである」と記しているように、共同研究のいとなみをふまえた広い視野と、総合的な観点とが、この本の平易な表現の背後にあるからなのです。

(上山春平)

(B5版、三五四頁、岩波書店)

訳」というかたちで日本に紹介されたことには、ある意味で根本的な疑問を感じざるをえない。紹介するに値しない、ということではない。「翻訳」という紹介のしかたが適当な本かどうか、である。無論、これかわたしが述べようとする批判に対して、

訳者樋口謹一氏には、反批判の自由がある。

この本は、一九六八年五月を頂点とする現代フランスの政治構造と政治的諸潮流の行動のさまざまな特徴を剔出しつつ、そのうえに立って、今後十年間に左翼がとるのが望ましい行動ないし政策を提案しようとする。この明確に限定された目標を追求するために、著者は、叙述にあたつて、つぎのような方法を採用している。第一に、なまのデータは取扱わない。なまのデータを提示しつつ、それを分析し、そこから結論を導いてくるのでなく、結論だけがいきなり読者のまえに投出される。第二に、いわば二次的な抽象はおこなわない。つまり、たとえば先進資本主義国なら適用できるような一般の命題にまで抽象度を高めるのでなく、抽象化の水準を、より低い、いわば一次的な抽象にとどめて、さしあたってはフランスに適用できる命題として示している。この二重の抑制は、著者のとる限定された目標に対しては、事実、有効な一つの方法であると思う。ことわつておくが、「権力」の章は、第二の抑制から自由な唯一の例外であつて、著者はこの章を「時として無味乾燥であることは隠すべくもない。

怠惰な読者はこの章を飛ばされるがよろじかるう」と述べているが、フランスの読者にとつては無味乾燥であつても、わたしには面白い、ほとんど完全に理解できた唯一の章であつた。この章が二次的な抽象の水準で書かれてゐるからである。

しかし、この抑制が、外国の、といつてもヨーロッパ共同体に属するフランス以外の国の読者にとつてならいざ知らず、わたしたち日本の読者にとつては、二重の負担となつてあらわれる。第一に、フランス現代史のかなり細部にわたる知識をもたない読者には、著者の示すさまざまな結論の意味がよく理解できないし、まして妥当かどうか判断できない。第二に、結論ないし提案として述べられた命題から、読者（政治的左翼）にとつて有効な、なんらかの示唆を引出そうとすれば、二重の操作をおこなわなければならない。まず各命題の抽象度を高めて二次的な水準にまで引上げ、つぎに日本の具体的な状況に適した、一次的水準にまで引下げた命題として定式化するのである。この二つの負担は、特殊な研究者のみが耐えうる性質のものであつて、わたしを含めて一般の読者には到底耐えられない。

いだらう。

読者にかわつて、この二つの負担を背負うこと、それこそ紹介者の仕事ではないだろうか。いいかえれば、このような本は、著者の結論や提案を、具体的な事実に照らしてその意味を解き明かし、妥当性を検討し、かつ、そこから一般的命題をできるかぎり引出す、という形で紹介されるにふさわしいように、わたしには思ふのだ。いいかえれば、「翻訳」の形式をとおしてでなく、中国風にいえば「札記」の形式によつて紹介されるのが望ましい、とわたしは考える。勿論、その際には、著者のいう「契約政策」が日本の政治的社会的風土のなかで実現可能性をもつかどうか、もつとしてどの程度の有効性を發揮しうるか、といった根本的な検討がおこなわれる必要がある。

しかし、実をいえば、わたしは樋口謹一氏に期待しているのは、そのような形で紹介の作業ですらない。フォセールがフランスについておこなつたような作業を、樋口氏が日本についておこなうことである。

わたしは、ひたすら、樋口謹一著「社会主義？論」の出現を、刮目して待つのみ。妄言多謝。

（山田慶児）

別して一端をなす

——異端運動の研究——

『山鹿語録』第三十三卷に、「異端ヲ論ズ」と題されたボレミークがある。「雑学ハ、同ジク聖人ヲ師トスト雖モ、ソノ源聖人ト同ジカラズ、コレ異端トナル所以ナリ。」論難の鋒先は王陽明の学に向けられる。「王氏ガ説ノゴトキハ学ヲ為スノ工夫専ラ聡明ニ馳セテ、言ウ所為ス所皆異端ニ落在ス。」素行によれば同じ聖人の道に志しながら、差謬も甚しいというのだ。

周知のように「異端」ということは、『論語』為政篇「異端ヲ攻ムルハ害アルノミ」に溯る。「攻」の解釈はわかれており、素行は「伐」の意をとり、「治」を捨ててゐるが、それはここではどうでもよい。「異端」についての朱熹の注は「聖人ノ道ヲ非トナシ、別シテ一端ヲナス、楊墨ノ如シ」とある。素行もまた王学とならんで楊朱、墨翟の教えを「論説淺薄ナリ」として、異端に擬している。そればかりか筆は及んで、老莊、仏教に至る。「聖人ヲ師トセズ、ソノ教正シカラザル雑学異端」

のことである。かれの才知溢れる分類によれば、異端の甚しきはその極、両端にあり。一は人情を矯むること、二は情を直くして徑ちに行なうこと、である。前者は人を死灰槁木のごとく無力にし、自然の倫をも絶たしめる仏教の教え。後者は放逸流蕩して天年を終えようとする老莊の快歎の教え。聖人の道を師とせぬ誤てる二異端は、人間についての思念において、ちょうど正反対にあるというのだ。

朱注に言う「一端をなす」とは何のことであろう。「端」の指し示すイメージは、定線分の両極、定平面の周辺、さなくば幾何的中心から距離をおいた地点のことだ。少なくとも素行においては、定まった境分内での、他の地点との関係が問題になっている。素行の思うには、聖人を師とする王学も、師とせぬ仏老莊も、いずれも同じ異端なのだ。別して他の平面に拠っていないと見るからである。

ラテン語の異端者ヘレチクスなる語は、もとギリシャ語だが、特定の立場や集団を択びとる人々のことだ。やがてキリスト教に入って、正統教義について、イエスの教えの解釈をめぐる正統教会に逆らうものが異端とされる。キリスト教内の価値の序列に乗ってくるのだ。ところでラテン語は、これと区別して異教徒ヘテロドクスなる語をもっている。もとは異邦人という意味だ。ユダヤ教であれ、民間俗信で

あれ、のちには人文主義であれ近代科学であれ、キリスト教の神に仕えぬものは異教に属する。正統教会はもちろん、これらを容認しようとはしないが、しかし其棲を否定もしない。異教も討伐されねばならないが、異端を討つときは、また違ったやり方がある。トマスリアクイナスのやり方など、そのヒナ型のような。かれらによれば、まことに異教とは聖人の道を師としていないからである。別して一端をなし、あるいは師の道の両端の極のあいだにさえ位置していない。問題の対象と土俵とを別にしているからである。

山鹿素行が、自から王者を宣言した定平面は仏儒老すべてを載せている。それぞれがもとといえは異なる神に仕えているにも拘わらず。このことは日本人の精神態度一般とひきくらべても奇とするにはあたらぬ。私たちは今、どこへ行っても一連托生の大平面に乗っている。ときに、別して一端を設けてみるだけだ。かつてエラスムスが両教会についてそうあったように、異教徒つまりは異邦人であることができないのだ。近年発掘が注目されるものでさえ、「異端の画家」「異端の思想家」にすぎない。私たちはまだ、異端者と異邦人との区別を、身につまされて知ってはいない。

(樺山紘一)

比較文明論の旅

——文明の比較社会人類学的研究——

波を チャプチャプ チャプチャプ かきわけて
雲を スイス スイス スイス おいぬいて
ヒョウタン島は どこへゆく
ぼくらをのせて どこへゆく

笑いのおい研究会である。厳肅な、おももしろい学問的雰囲気なかで、しずしずとすすめられる研究会とくらべてみると、なんとそうぞうしく、不謹慎なほどのざわめきであろうか。

比較文明論班は、梅棹忠夫教授を班長として、一九七〇年四月に組織された。研究班の歴史的経過からいえば、今西錦司博士（現岐阜大学学長）を班長とする霊長類研究班から、梅棹班長の重層社会研究班をへて、現研究班にいたっている。これを人類史的にみれば、霊長類社会にはじまって、単層社会、重層社会を経過して、やっと文明社会を問題とするところまでやってきた、とい

えるだろう。いわば、共同研究班として、人類史的旅を追体験してきた、ということにでもなるうか。

人類学において、文明社会をその研究対象とするうごきがでてきたのは、ごくあたらしいことである。したがって、文明社会を分析し、その本質をときほぐすための、人類学的方法論は、まだじゅうぶんに用意されていない。ただ、従来の方法論から、ひとつ飛躍した方法論を確立する必要があることは、予感として共有されているところではあるが。いずれにせよ、現在は模索の時代なのである。

いまでも、文化論的視点からは、かすおおくのことがたられてきた。日本文化論、東西文化比較論、比較文化論など、その例をあげてゆけば、きりのないことだろう。しかし、文明論的視点は、ともすればインチキくさいものとうけとられ、かるんじられてきたきらいは、ないであらうか。

じつのところ、この研究班においても、文化論的視点と文明論的視点とのズレを、どのようにとらえるか、をめぐって議論がはじまったばかりである。いまでもなお、文化論的視点をはなれてものをみることは、なかなか難儀なことなのである。

文明論のとりあつかう対象は、歴史軸と空間軸にそって、どこまでもひろがってゆく。そして、問題は問題を

よび、すべては連鎖状につらねられるであろう。その連鎖状のつらなりを、どこかで、ひとつの統合体としてとりだすてだてはないものだろうか。人間社会を構成する諸要素を、各文化要素に分解することなしに、統合体としてとりだし、構造的把握をやりうるような方法論を、発見することができるだろうか。もし、それを、共同作業としてやりお世話したときには、世界的視野のなかで、諸文明の位置づけをおこなおうとする、この研究班の趣旨は達成されたことになるであろう。

しかし、みはるかす未知の荒野に、われわれのたどるべき道のかげすら、まだ目にはいらない。ぼうぼうとひろがる地平のみとり図を、これからかこう、というわけである。とにかく、旅ははじまっている。それが、一瞬の共同幻想をかいまみることにおわるかもしれない、というおそれを心にいだきながら。はたして、この旅には、おわりがあるものだろうか。

まるい地球の水平線に なにかがきつと まっている

くるしいことも あるだろうさ
かなしいことも あるだろうさ
だけど ぼくらはくじけない
なくのはいやだ わらっちゃおう

すすめ……………

(井上ひさし作詞「ヒョッコリヒョウタン島」
から)
(松原正毅)

経済史データ・ライブラリーの構想

——社会科学における電子計算機の利用——

情報処理のごく一般的なシステムは、図書館業務とのアナロジーを使えば、ごく単純なものである。必要な書物を収集したライブラリアンは、それを分類し索引カードをつくり(情報の整理)、棚番号にあわせて書架に収納する(情報の蓄積)。一方、利用者は、書名、著者名あるいは内容によって必要文献を指示すれば、係員がこれをカードで検索し、書棚からみつけだす(情報の検索)。

これを複写して、あるいはそのままで利用者に手わたす(情報の加工・配布)ことでこのフローは完了する。一般にデータ・ライブラリーあるいはデータ・バンクと呼ばれるのは、コンピュータの利用とむすびついたこの情報処理システムの中の、情報集積の組織に他ならない。それはまさしく、図書館の書庫に匹敵する。したが

ってこの書庫に何をつめるかは利用者の専門と必要によって異なるわけだが、(計算の複雑性よりもむしろ)データの大量処理に特色をもつ社会科学のコンピュータ利用の一般的性格からいって、機械処理に直結しうるデータの蓄積は多くの利点をもつことになるだろう。今日コンピュータ利用可能な社会科学系データは、処理技法の進歩によってどんどん広がりがつつあるが、その内容は、三宅氏の分類によれば次のようなものがある。

(1) 統計データ。経済統計、国勢調査データ、選挙結果など。

(2) 社会調査データ。世論調査データ、面接調査データ、労働調査データなど。

(3) 実験データ。心理学実験、シミュレーションなど。

(4) 歴史データ。(統計データを除くと)経歴データ、行動データなど。

(5) その他。言語データ、判例集、条約集など。

これらのうちでも、内容が数値情報にかぎられる経済統計類のデータ・ライブラリーの作成は、その技術自体かなり容易であるといえよう。これは、経済史にかなする数量データについても同様であって、マクロデータを中心に、歴史統計の整備が世界的にすすんでいる今日、国内的にはもちろん、国際的にも情報の交換と利用がこ

ういう形ですすめられることはおおいに期待されるところである。だれでもが理解し利用できる、開かれた歴史統計・ライブラリーの設立は、われわれ数量経済史（Q・E・H）にたずさわるものの希望でもあり義務でもあら……のだが。

（山本有造）

国外との交流

燉煌写本の研究

われわれの研究班の大きな泣き所は、研究対象、つまり燉煌写本のはとんどが国外、それもヨーロッパにあって、国内には学術研究に供し得るものが極めて少ないというところである。ひと通りのものは写真になって来ているが、写真で一切を済ませるといふわけには行かない。そこで何とかヨーロッパに出かけ、あるいは、ヨーロッパでそれを扱っている人たちに来てもらわねばならないことになる。

幸いなことに、現物を見に出かけることの方は、まず順調に行っていると言える。去る六六年末に、ベルリン・アカデミーで、所蔵のトルファン漢文写本断片の目録

を作るのを手伝ってほしいとの申し入れが来た。六七年の学会に私が出席した機会に下見をして来て、六八年に井ノ口泰淳君（竜大）、七〇年に古泉円順君（四天王寺大）、七一年に上山大峻君（竜大）がそれぞれ数か月間東ベルリンに滞在して、その仕事をやり、みな足をのばしてロンドン、パリ、レニングラードの諸蒐集集も見て来ることができた。あとの二回は、私もついて行って、一、二週間だけつき合った。短期間しかつき合わなかったのは、東ドイツが国交未回復国であるために、公務員の場合は、今までの北京行と同じ扱いを受けるからである。井ノ口君の分は『目録』第一巻となって、すでに印刷がはじまった筈である。右のほかに石塚晴通君（青山大）も単身でヨーロッパに出かけた。同君は漢文写本の加点的研究を専門とする。淡く消えなかった朱点など、マイクロフィルムなどでは十分な研究をすることは絶望である。

ところが、先方の人に来てもらうことは、なかなか容易でない。前号にも書いたように、今春ベイリー教授に来てもらうことができたのは全く幸運であった。ほかに、同じく日本学術振興会の流動研究員プログラムによって、レニングラードのメンシコフ氏の招待を申請したのが、採択はされたのだけれども、先方の出国許可が出ないために、今年度は見送りとなった。もちろん、そう

したことが予想できなかったわけではないので、昨年それを申請する前にモスクワで東洋学研究所の所長や渉外部長にも会って、十分に地ならしをしたつもりだったのであるが、ああいう巨大な国では、その程度の準備では何の役にも立たなかったらしい。

もう一つ、ベルリン・アカデミーの古代史考古学中央研究所でトルファン写本を担当しているティロ博士を来年あたりに招くことになっている。もともと、はじめに井ノ口君が招かれたすぐあとに、此方が同博士を招くという約束で、この協力が発足したのであるが、これも出国許可が難かしくて、今まで実現しなかった。此方からの訪問ばかりがたび重なるうちに、今年になって急に上層部が古い約束を思い出したという次第である。

さて、それが実現するとなると、役所関係の手続など、たぶん困難を極めることになると思う。何年か前に中国から学術代表団を招いたときの困難と、同じ性質の困難が待ち構えている。ただ、人数が多くない点では、いくらか負担は軽いと思うけれども、いろいろな面倒な工作をやってくれた友好団体にあたるものが、こんどの場合は何もないので、一切のことがわれわれ自身の負担となりそうである。

(藤枝 晃)

文化大革命中出土文物

——漢代文物の研究——

一〇月八日、本館会議室で朝日放送カメラマン撮影の「文化大革命期間出土文物展覧」の一六ミリフィルムのレストランを観る。本年八月、ジュニアピンボン選手団に同行したカメラマンが偶々故宮博物院で開かれていたこの展覧会の展示品を撮ってきたもの。朝日放送の記者鈴木氏より写っている品物の内容、学問的価値について教示してほしい旨、藤枝教授に依頼があり、同教授が漢代文物研究会のある日を指定されたのである。編集されたものは一一月三日に放映されている。

文化大革命中に貴重な考古資料が大量に発見されていたことは、本年五、六月に中国を訪問された井上清教授の帰国談によって初めて知ったのであるが、その後「人民日報」(七月二十四日号)「人民中国」(一〇月号)、「アサヒグラフ」(一〇月八日号)などに写真入りで大々的に報道された。朝日放送撮影のフィルムの中に、上記出版物の中に見えない出土品を幾つか見出すことができたのは喜びであった。中でも目を見張らせるのは、何といっ

でも満城の中山王劉勝及びその妻の寶綰の墓（前二世紀末）の出土品である。この時期の、このような高貴な人物の墓が全然盗掘されずに発掘されたのは空前のことであり、金、銀、軟玉その他の半宝石類をふんだんに使用した豪華な出土品の数々は、この時代の美術に対する我々の観念を全く改めさせるものである。

われわれ中国考古学の研究者はこの映画を見終って、文化大革命中のこれら発掘の成果が出版物の形で公表される日も遠くないとの期待を大きくしたことである。

（林巳奈夫）

わが化政文化論

——日本文化の研究——

従来、化政期の文化は、近世から近代への過渡期にあられる主として都市の類廃的な文化としてとらえられがちであった。この「類廃」という言葉は大正のはじめごろから尾崎久弥・永井荷風らによってむしろ肯定的につかわれはじめたが、その後は否定的なものとしてとらえられ、さいきはふたたび国芳の浮世絵・南北の歌舞伎などが前近代の可能性をふくむものとして評価されて

きた。われわれはもういちど類廃とは何か、それはどのような意味をもつのか、といったことを真正面にすえて追求してみる必要があるのではなからうか。また、俳諧などみるこの時期の地方文化の量的なひろがり、田能村竹田や国学など地方文化の質的な高まり、さらには、中央と地方のコミュニケーションのありかたなどは、第一回めの報告で見落されがちであった宗教・教育・政治過程とかかわりとともに今後の大きな課題であらう。

化政期の文化は、ひとつには文人の文化でもある。人文にあつまるかたがたは、それぞれ現代の文人であろうが、この研究班にも数奇者、文人がすくなくないようである。何をもちて文人とよぶかは別として、化政期の文人はほとんど煎茶をたしなんでいる。そこでこの十一月の末、わが研究班員でもある小川流家元による復原茶会が計画されている。本床には大雅堂の双幅、脇床には皆川淇園が掛けられ、お道具は化政期に煎茶を大成した小川可進遺愛のものもちいられ、その時期の煎法が忠実に復原されるという。ことに「芸能史研究」三十一号に翻刻された可進の茶会記と考えられる「烹茶記」に図入りで記載されている春日盆・山字屏は初期煎茶会の姿を具体的にしめしてくれるであらう。この人文の文人茶会の茶会記はおって報告されるであらうが、さまざまな意味で世の語り草になるであらう。

（赤井達郎）

研究ノート



政治文化の国際比較

三宅 一郎

民衆にとって政治とは何であらうか。民衆は政治にある理想を求めるが、それほど期待をかけるわけではない。ときに政治家を利用するが、政治家を軽べつし、自ら政治の世界に身をおこうとはしない。政治家の誘いには無関心をもって答えるが、彼らの圧迫には強く抵抗する。

民衆の多くが政治的無関心層とかDKグループとか呼ばれて、政治分析においてしばしば無視され、政治活動家や理論家によって叱咤される存在だとしても、生活者としてどうしても政治の世界とかかわりをもたざるをえない場が二つはある。一つは職業の場であり、もう一つは生活の場としてのコミュニティである。これらの場で民衆は政治的問題解決を

求めて政治と接触し、政治の側では権力の基盤と果実を求めて生活に介入しその組織化を企てる。両者の協調、見合、反撥、抗争が展開される。ある社会に普遍的な政治の見方、考え方を「政治文化」と呼ぶとすると、民衆の政治文化は上述した政治との接触過程でとくに著しく露呈されるであろう。

政治文化は基本的、一般的な政治的信条の体系であり、その社会の人々が当然と考えて疑わないようなものだから、ある一つの社会のクロスセクション（横断面）をとるだけでは把握しがたい。一つの社会での歴史的研究か（石田雄「日本の政治文化」はこの一例である）、いくつかの社会にわたる比較研究が要請されるゆえんである。わたしが現在従事しているプロジェクトは、とくにコミュニティの問題解決という場で示された政治文化を、日本、アメリカ、インド、ナイジェリアの四カ国間で比較分析しようとするものである。

分析の対象とするデータは主として面接調査データであって、一九六六年から七〇年にかけて、四つの国ではほぼ同じ質問紙を用いて行なった面接調査によって蒐集された。さきに歴史的研究と比較的研究かという二者択一的でない方をしたけれども、もちろん両者は排他的ではない。一社会の政治文化の歴史的研究が、明示的でないにせよ比較的視野を必要とするように、面接調査データによる比較研究においても、解析されたデータの解釈には各国の政治体系の知識はもちろんのこと、その歴史的背景をも十分心得ておかねばならぬことはいうまでもない。「政治文化は政治体系全体の歴史と体系を現に構成している個人のライフ・ヒストリーの総合的産物」

(L・パイ)だからだ。各国の専門家たちの指導がえられることになってはいるものの、大変な研究に入り込んでしまったものだという思いである。アメリカ研究では少しばかり年が入っているとしても、インドの研究は始めてわずか三年にしかならないし、ナイジェリアにいたっては本を数冊買っただけで今だに「つんどく」の状態で、これから数年間は全力投球を覚悟せねばならない。

比較対象の選定、調査の方法、質問文の機能的同一性、データの比較可能性など、このような面接調査による政治文化の国際比較に関しても、問題点はいくらでもあげられる。だが十分な紙面もないし、第一すでに河は渡られたのだから今さら論じて見てもいたし方ないともいえる。角力でいえば仕切はもう制限時間を過ぎ、今やまったなしという時期にある。

中国現代作家の経歴調べ

算 文 生

もう十五年以上も前のことである。新中国を訪問してこられたばかりの倉石武四郎先生の話を書く会が楽友会館でもたれた時のこと。太原かどこかで病氣になった時、往診してくれた医者言葉がわからなくて困ったというような話のあと

で、「趙樹理の生まれた年がわかったよ。日本でこれまでいわれていたのとは一年違っていた。本人に会って確めたのだから間違いない」と、名刺のうらに趙樹理が直きじきに書いてくれたものを見せながら、嬉しそうに笑っておられたのを、今でも覚えていて。このことについてはのち『中国現代文学選集』9・趙樹理集(一九六二・平凡社)に付された月報に先生の一文が見え、それには「一九〇六年生於山西」という趙樹理のサインの写真まで掲げられている。しかし同巻の駒田信二氏の解説では一九〇五年生まれである。最近出た『現代中国文学』8・趙樹理(一九七一・河出書房新社)の小野忍氏の解説では、中国の出版物の紹介では、どれも一九〇五年生まれとなっているが、倉石教授のは「趙樹理に会って直接確かめられたものであり、異論をさしはさむ余地はなさそうなので、ここでは一九〇六年説に従っておく」とし、陰暦を陽暦に換算する時のずれが一年ちがいの原因かもしれない。そして小野氏は『世界大百科事典』(一九六六・平凡社)では一九〇六年説を採り、『世界文学小辞典』(一九六六・新潮社)では一九〇五年説に従っておられる。それがどちらであっても趙樹理の文学を考える上で大した問題になるわけではあるまいが、異説のおこりを知らぬものに将来とまどいをおこさせることだけは確かである。

これは北京大学の日本語科を卒業した人から文革以前に聞いた話。「わたしは日本語を勉強したおかげで、朱徳の『偉大なる道』を読むことができた。わたしたちには、自分たちの指導者の経歴は外国人の書いたものでしかわからないんで

すよ。」

これは文学者の場合にもあてはまる。もう古くはなかったが現代文学研究者の間で重宝がられている『中国新文学事典』（一九五五・河出文庫）のような便利なものは、中国にはない。もっとも『中国新文学大系』第十集（一九三五）に収める「作家小伝」があるが、なにぶん三十年代以前のことしかわからない。解放後出版された現代文学史も、作家の経歴はほとんどなにも記さない。東北師範大学の『中国現代文学史』上巻（一九五七）が例外的に、魯迅・郭沫若・茅盾・瞿秋白についての経歴を記すが、この四人の作家以外には及ばない。

近頃『魯迅全集注釈索引』（東洋学文献センター叢刊第十三輯）が出版され、編者の丸山昇氏がまえがきで述べておられるように「一つの近・現代文学事典の役割を果たさせる」ものとなり、われわれ研究者は大いにその恩恵にあずかれることになった。しかしもちろんこれですべてが事足りるわけではない。

先日必要があつて創造社の詩人穆木天の経歴を調べるのに苦労した。三十年代以後のことがよくわからないのである。死ぬ数カ月前の魯迅が、例の周揚・田漢ら「四条漢子」と会つて、胡風はスパイだと告げられ、その証拠を求めると、穆木天から聞いたというので、あの転向者のいうことを信じるなんて、あいた口がふさがらない、と書いているくだりがある（徐懋庸に答え、あわせて抗日統一戦線の問題について）。してみれば穆木天は転向者なのであるが、この部分にはもち

ろん、周揚らにとつて具合が悪いためであらう、魯迅全集はなんの註も加えていない。先にふれた倉石先生の月報の文章によれば、一九五四年十月、先生は北京で、中国作家協会の招待宴の席で、夏衍や田漢ら多くの作家のほかに「わかれてひさしい穆木天」に会つておられる。雑誌や新聞をたんねんに繰つてゆけば、ある程度わかるのであらうが、なにしろ急場の間には合わない。

一人の作家の生卒年を調べるだけでも一篇の論文を書くに匹敵する労力が要る。そんな作家がいっぱいいるのに文学事典を作るなんて至難の業だという人は多い。まして文革後の中国では専門作家などなくなつてしまふかもしれないとなれば、なおのこと個人の履歴が紹介されることは今後ますます少なくなつてゆく可能性がある。中国ではもう忘れさられてしまつたり、批判されて姿を消してしまつた作家の経歴など漁つてどうする、という意見があるかもしれない。しかし文革という大地震を経過した今日、これまでの知識の総括をし、中国の文学史からその経験と教訓を汲みとるためにも、新しい中国現代文学事典が作られるべき時期に來ているのではないだろうか。それは確かに困難な仕事には違いないが、はじめから完々全々なものを要求しなければ、案ずるより産むが易いかもしれないのである。多くの研究者の手に成る新しい事典の出現を望むことや切である。（一九七一・一〇・二三）

旅だより

沖繩を旅して

井 上 清

私は十一月三日から八日間、沖繩近代史について琉球大学史学研究会の諸君と討論し、かねて、史料蒐集のために沖繩に旅行した。

はじめて沖繩を旅して、書物や文書だけからでは、十分に読みとれなかったことを、いささかさとするところがあった。たとえば、宮古島と八重山島——沖繩本島の人のいわゆる先島——をタクシーで一とまわりしたときのことだが、運転手に、私が、「やはりこちらは本島よりはいぶん南によっているだけに、本島よりも暑いですね」というと、運転手は、「ええ、琉球でも、ところによって気温もちがいますし、いろいろのことがちがいますよ」と答えた。

私はこの「琉球」ということばに、はっとした。私たちにとっては、「沖繩」ということは、行政上のかつての沖繩

県の地域全体が思いうかべられるのだが、先島の人は、沖繩といえは沖繩本島のことであり、「沖繩県」の全地域は「琉球」といいあらわすのか？。これは何でもないといえは何でもないことだろうし、また、先島の人々がみな、私の乗ったタクシーの運転手と同じようないい方をするのかどうか、私はたしかめたわけではないが、私にはこのいい方にはかなり大きな意味があるように思われた。そこで、気がついたのだが、「先島」とは、沖繩本島から見て先の方の島であるが、宮古、八重山の人からみれば、本島こそが先島になるのではないか。これと同じように、ヨーロッパ人からみれば、アメリカは「新大陸」だが、アメリカにもとから住んでいる人にしてみれば、ヨーロッパ人こそ新来人であり、その住んでいるところは、「新大陸」ではないか。

沖繩本島を基準として考え、琉球全体を沖繩とよび、宮古・八重山を先島とすることは、宮古・八重山が、かつて本島にある琉球王国にとつての植民地的属領であったという、歴史に由来するものである。そして、いまでも、本島人の「先島」人に対する差別は生きている。だから、宮古・八重山の人は、じぶんを沖繩人ではなくて琉球人だと意識するのではないか。

これに関連して、去年十二月のコザ暴動に立ち上った人々の多くが、宮古・八重山出身であること、そして、あれだけばげしい反米暴動をおこした人々が、そのしばらく後の沖繩全軍労のゼネストに対して、それは明らかに反米の行動であるが、決して共鳴したのではなくて、むしろ、もっとも積極

的に反対行動をおこしたということも、これは本島人から聞いた。この意味はかなり深刻なものがあるように思う。それを分析するのは、本文の目的ではないが、要するに「沖縄」とひとくちにいったのでは、その歴史も、その現実の問題も、十分にとけないことが、こんどの旅で実感された。

もう一つ、私にとって今度の旅行の資料的大収穫は、いわゆる尖閣列島が、日本領であることは自明であるとは決していえないこと、歴史的には、もとは「台湾などと同じように中国領であり、これが日本領にされたのは、日清戦争の勝利の後であることを、確認する資料を得たことである。これについては、きちんと歴史的考証をとこのえた論文を、なるべく早い機会に発表したい。

この資料入手についても、また九日間にわたる旅行のすべてについても、京大出身で、わが研究所東方部の「辛亥革命研究班」に参加していた、金城正篤君（琉球大学助教授）御夫妻にたいへんお世話になった。金城君たちと、もっと自由に往来して、研究をとにもすることができる日の、一日も早からんことを願うてんにおいては、私は人後に落ちないが、そうかといって、いまの施政権返還協定には、私は決して同意できない。琉球の人々が、たといわゆる「復帰」がおくれても、いまの協定批准阻止をさげぶ気持が、現地を旅してみると、いたいほどよくわかる。それだけでなく、たといわゆる「無条件」「全面」の復帰であつても、「復帰」という考え方そのものを否定する思想がきわめて強く琉球人にはあり、私自身も、「復帰」という発想ではなく、ヤマトと琉球

の人民が真に対等に結合する新しい方式をつくらねばならぬいとのもとのからの考えが、今度の旅行でいっそう強くなった。それについても、早い機会に何かに書いてみたい。

アメリカで聞いた演奏家たち

内 井 惣 七

ミシガン大学のあるアナバーは人口十万余の小さな町だが、文化都市を名目とするだけあって、大学の音楽協会の主催で一流音楽家をそろえたコンサートがたくさん聞ける（音楽に関しては、アメリカのまさに「穴場」だ）。主な行事は秋・冬のシーズンのコラルユニオンシリーズおよび室内楽シリーズ、毎春オーマンデイのフィラデルフィアと多彩なソロイストたちをそろえて四日間開かれる音楽祭、それと夏のピアノリサイタルシリーズである。切符はシリーズチケットを買えばきわめて安い（例えば、最上席十回のコンサートが三十五ドル）。印象に残る演奏家の寸評を以下に述べてみよう。ピアニストが多いのは私の好みによる。

(1) ピアニスト

ルービンシュタイン——八十歳を超えてまだ健在、アナバーで聞いた二回ともすばらしい演奏だった。テクニクはまだまだ衰えておらず、豊かな音楽が迫り出される。当然の

ことだが、人々に凄い人気がある。

ゼルキン——彼も二回来た。最初のときは前半ベートーベンの「ワルトシュタイン」で策を練りすぎてかえってうまくゆかなかったような感じの演奏、しかし後半のショパンの「前奏曲集」はききごたえがあった。二度目はオーマンディとの協演で「合唱幻想曲」と「皇帝」、文字通り満場をわかせた熱演であった。

リフテル——アナーバーに来たときはあまり調子が乗らなかったようだ。少々くずれた感じのシューマン、しかしプロコフィエフのソナタでは彼の迫力の片りん（全てではなかったろう）がうかがえた。

ギレリス——オールモーツァルトプログラム、堂々としたそれなりに説得力のある演奏で好演。イ短調ソナタ（K.30）をああいう弾き方もあるのかと感心しながら聞いた（リパッティのレコードがあまりに印象に残っていたので）。

レナード・ペナリオ——ドビュッシー、ラベル、ことにシューマンがすばらしく、このピアノストをみなおした。非常に洗練されたピアノストとみうけた。

アンドレ・ワッツ——彼はかなり複雑な混血で黒人の血も入っている。一度目は小沢のNYフィルと協演でラフマニノフの三番、二度目はオーマンディと協演でブラームスの二番、いずれも強靱なテクニクとよくコントロールされた表現とで、才能の豊かさをうかがわせた。

そのほかアジュケナージ、ミッシェ・デビター、ヴァン・クライバーンも忘れたいが、長くなるので省略しよう。

(2) 演奏者

フルニエ——例のロストロポーヴィッチ謹慎事件で代わりに来た。実に優雅でよく流れる音楽だ。バッハ「無伴奏六番」、シューベルト「アルペジオーネ」、それにフランクのソナタ（通常バイオリンで弾かれるもの）、いずれ劣らぬが、私にはシューベルトの印象がいちばん強い。

スターン——前半のモーツァルトなどは平板で退屈な演奏、しかし後半のブラームスのソナタでは、実に魅力的にうたう出だしからわれわれを引き込み、しまいまで魅了してはなさなかった。巨匠の實録であろうか。

メニューイン——思ったよりキメのあらい（音程など少々だらしない）演奏だったが、モーツァルトの協奏曲五番などは好演だった（指揮と独奏と二役）。彼のオーケストラは予想以上にうまかった。

(3) 声楽

レオンタイン・プライス——彼女も凄い人気だ。少々下り坂に入り始めたかなと思わせるところもあったが、ものすごい迫力がある（ヴェルディ「運命の力」）。反面モーツァルトのアリアでは実にキメの細かい歌を聞かせた。

マーティナ・アロイヨー——彼女は日本ではあまり知られていないようだが、プライスについて最近メトロポリタンのプリマ・ドンナにのし上った黒人ソプラノである。私が聞いたのはカーネギーホールでスタインバークのピッツバーグ交響楽団と共演したヴェルディ「レクイエム」だけだが、四人の独唱者のうち、ずば抜けてうまかった。

モルモン会堂聖歌隊——この合唱団は毎週CBSのTVネットワークで全国に放映しているが、そのリハーサルがソルトレイクシティのモルモン会堂で公開されている。私はこれを聞いた。聞きしにまさるすぐれた合唱団で、会堂の大オルガンと相まって、私は二時間余りその歌声をたんのうした。

(4) 指揮

ジャン・マルチノンとフランス国立管絃樂團——マルチノンはいつ聞いてもうまい。実に端正で見事に盛りあがるシェーマンの四番「ラ・ヴァルス」(Fantastic)、それにメッタメタに面白いストラウスの「オイレシシュピーゲル」を聞いて、あんなに興奮したのははじめてだ。

オーマンディとフィラデルフィア——これで感動したのはマラーの「復活」だ。コントラルトとコーラス(大学のコーラルユニオン)もみごとで、めったに聞けないほどの名演だったと思う。

ズビン・メータとロサンジェルス・シンフォニー——この話題のインド人指揮者は、ハイドン、ウェーベルン、ブルックナーというプログラムをアナバーで聞かせた。ブルックナーは途中で退屈したが、ウェーベルン(「オーケストラのための五つの小品」)がすごかった。それに若い美人のオーボエ奏者がハイドンの交響曲のメヌエットで実にきれいなソロを聞かせたのが印象に残る。

岩城宏之とN響——フィラデルフィア、NYフィル等のあとで聞いたから馬力の違いは明瞭だったが(演奏旅行のため)いつもより小じんまりしていた)、好演だったと思う。チ

ヤイコの五番と、とくにアンコールの日本民謡メドレー(ヤスギ節のハヤシが入る)が好評で、まわりの聴衆から「あれはなんの曲だ」と聞かれた。

(5) 室内楽

ザグレブ合奏団——永年これを指揮したヤニグロが去り、指揮なしの演奏だったが、実に生き生きとした見事なアンサンブルで聴衆を魅了した。パッハの「二つのバイオリンのための協奏曲」がいまも耳に残る。

モスクワ・トリオ——このトリオは初めて聞いたが、シヨスタコのトリオとチャイコの「偉大な芸術家の思い出」の熱演で満場総立ちの拍手をうけた。

——というような具合でアナバーでは音楽を楽しんできたが、一つだけ心残りがあつた。それはメトロポリタン・オペラをついに一度もみる機会がなかったことである。(九月—四月のシーズン中は私は学問に精出しており、ニューヨークにまで出てゆく余裕はない。)ニューヨークにいる友人の話を知をくわえて聞いただけであつた。

ウィーン・チロル・パリ

河野健二

私は日本学術会議から派遣されて本年八月二日から九月

二〇日までの一カ月間、オーストリア、スイス、フランスを廻ってきた。主要な目的は、IEAと呼ばれる「国際経済学協会」の評議会に日本代表として出席することであったが、評議会にひきつづいて七日間、「経済発展における科学・技術の役割」をテーマとする研究集会がもたれ、もちろんそれにも出席した。

学会はオーストリアのチロルの山中、サン・タントンと呼ばれるスキーマの名所で行なわれた。私は一たんウィーンに着いてから、スイスのチューリッヒにとび、さらに汽車でオーストリアへ入るといふ廻り道をした。ほぼ五十人の経済学者がサン・タントンの二軒のホテルに分宿し、泊りこみで討論をつづけた。学会は英仏両国語が公用語となっていたし、かねて知り合いのフランス人も来るのがわかっていたので、何とかフランス語で用が足りるつもりで出かけたわけだが、実際には英語をつかう人が圧倒的に多く、高名なガルブレイス、ヒックス、ロビンソン、パティンキン、ソ連からのハチャチエフ、それに日本からの都留氏などが交わすスピーディな会話を聞いているうちに、すっかり氣勢をそがれてしまった。

しかし、討論については、同時通訳の用意があったので、英語がわかりにくいときはイヤホーンをつければフランス語が流れてきて何とか事足りた（アメリカ人の英語よりもイギリス人のほうがはるかに聞取りにくかったのは、これでも日本にいてアメリカ語に馴れているせいだろうか）。しかし、朝から晩まで食事も一緒だから、食卓はどうしても英語が

必要になる。東欧諸国やアフリカ、香港の人なども英語でなければ話を通じない。「英語帝国主義」というものが存在することに私は気づいた。この帝国主義に抵抗しているのは、どうやらフランス人だけのものである。もっとも私のフランス語は、英語帝国主義の前でもろくも敗退したわけである。

学会がおわってフランスに移ると、言葉の苦労が少なくなってホッとした。パリでは珍らしく到るところで大工事が進行していた。東西の郊外を直通でつなぐメトロの建設、モンパルナスの駅の高層建築、到るところでの地下駐車場の建設といった工合である。メトロの出入口の鉄の門標があらわしているような一九世紀的なパリ情緒は、消え失せるのかも知れない。考えてみると、オースマンの時代からすでに百年経っているわけである。パリもようやく「近代化」のさなかを経過しつつあるのかも知れない。

もっとも、私の滞在した九月二〇日までの間には、所用であらかじめ連絡しておいた人は別だが、旧知の大学教授には誰れにも会えなかった。かれらは避暑地さきからパリにまだ戻っていないかった。私が帰国して後に、会えなくて残念という手紙をくれた人もある。大学教授の「近代化」は、日本よりまだまだおくれいているようである。日本では九月二〇日には、夏休みのことなど忘れて、講義やら会議やらで、すべての人は忙しい。ヨーロッパでは時間を長く感じたが、日本へ帰ると時間はとぶようにすぎ去る。これが「近代化」なら、喜んでばかりいられないと私は思う。なぜなら、速く生きることが、同時に速く死ぬことにもなるだろうから。

ロンドンからの便り

藤 枝 晃

ロンドンにて、一九七二年六月二十八日夜

河野先生

今日から会議（ロンドン大学パーシヴァル・デイヴィッド・ファウンデーション主催、第二回東洋美術コロクヒー「九〇〇AD以後の大乗仏教芸術」）がはじまりました。〃会議準備のため〃という名目で、会議の前に一週間の余裕を作って、その間に若くスタイン蒐集を覗いてくるつもりだったので、発表原稿を京都で作る間がなくて、今日までの一週間、毎日 Percival David Foundation の図書室へ通って、原稿をタイプに打って、本当に会議準備のために、一週間を過ごしてしまいました。脚の調子があまり良くないので閉口します。

今朝の開会式で、会長が開会挨拶をするのに、いきなり水野さんの追悼演説をはじめました。仏教芸術の研究が現在の水準になるについて、かれの貢献が如何に有力であったかという趣旨でした。参会者の殆んどが水野さんのなくなつたことを知ってなかつたので、大きなショックの様でした。そして、開会挨拶は追悼演説だけで、ほかのことは何も言ひませ

んでした。夕刻の開会レセプションの席で、会議参加者全員の名で弔電を京都人文に送るべきだと言ひ出す人が出て、どうやら明日の会議の始めにそれを決議することになる模様です。電報がついたら、御家族に申し伝えて下さい。

三月か四月にこの会議の provisional programme をもらつたのですか、どうせ provisional だから、いずれ大幅に変わるだらうと思つていたのが、その通りで行くということになつたのは一寸驚異でした。

去年のストックホルムの支那学会では、英語がよく聞きたれなくて閉口したので、今日は耳の遠いガバイン先生と並んで最前列に坐りました。幸い今日の発表者はみなイギリス人で、それにスライドを使うので、かなりよく聞きました。最後にペイパーを読んだのが、曾ての Lady David で、十年前か前に Sir Percival David がうちの研究所に来て講演したとき、ついて来て旦那の世話をしてた人です。その美しさに、H氏など物凄く感動してました。Sir Percival の全コレクションが、ロンドン大学に建物ぐるみ寄贈されたとき、夫人はその四階に生涯住むという条件だったのでそうですが、今は再婚して、別の苗字になっています。会場（考古学教室）の入口を確かめるため Foundation に寄つたら、偶然、門の前で、その人に会つて、びっくりして、そこから会場までの数十メートルの間、話し合つてゐる間に今日の発表者の一人の Mrs-Riddell というのが即ちむかしの Lady David と同一人である、だんだん判りましたが、しんどい数十メートルでした。

発表者以外にも、各国から、いろいろの人が来ていて賑かです。研究所になじみの人ではバリのダヴィドさん、ニューヨーク・メトロポリタンの周方君などで、周君は全部の発表に一々文句をつけて、なかなか元氣です。

会場はスライド二台を同時併映できる様になっています。そんなことを考えないで来たので、これからスライドを編集し直して、二台併映向きにします。六七年の東洋学会で、このやり方を見て感心して、先年、岩波講座のとき、無理を言って、映写機と小型スクリーンを持ちこんでもらったところが、ヒューズがとんで散々なことになり、爾来よそでは二台併映が普通だということをすっかり忘れてました。

開会レセプションで、日本学のダン教授とオニール教授とから、これから京都へ来るという学生を紹介されました。なかなかチャーミングな娘です。

会のあと、ケンブリッジへ先般送ってもらったマイクロフィルムの札を言いに行くつもりでしたが、脚の調子で、取止めにします（後記、これは結局決行した）。本日ベルリンよりヴィザの用意が出来たと知らせがありました。またケルンからも昨日手紙が来ました。昨年事故のあと、この大学病院でさんざん世話になったので、素通りも難かしく、ベルリンへの途中で寄ろうかと思ってます。

みじかい旅の感想

吉田光邦

モスクワでの一週間、レニングラードでの三日間、時間はいつもゆるやかに流れていた。第十三回国際科学史会議への参加は、日本の十月半ばを思わせるさわやかな気候にめぐまれて、まことに楽しい日々であった。

よくソ連に旅した人は、いろんな事務の繁雑さをいい、レストランなどの待ち時間の長いことをいう。けれども前者はわたしどもとはまるでちがった体制の国であることを考えれば、べつに問題とされることではあるまい。また食事に長い時間のかかることも、わたしどもがせっかちに急ぐことにのみ、大きな価値を与えてきた視点の差異にすぎないのではないか。

とにかくすべてはゆるやかで、すべてが巨大である。会場にあてられたモスクワ大学は、有名なレーニン丘の上にそばだって壮大なキャンパスを擁する。そこからはモスクワが一望のもとに眺められて見飽きない風景が毎日のように展開されていた。もちろん空はいつも透明で明るい。

革命後五十年をこえたこの国は、わたしがわずかにふれた都市に関する限り、ひとつの安定に達し成長をつづけている

ように思える。美しいことで有名な地下鉄もしょっちゅう利用したけれど、人びとの服装も華やかで明るいものが多かった。もちろんどこにも広告などはひとつも下っていない。ちかごろの日本はどこへ行っても、余りに広告過剰で猥雑きわまる世界となっている。そうした場に日々住まねばならぬものにとっては、モスクワのもつ清潔さはかえって気分を落ちつかせるものがあつた。そしてレニングラードは、まさに十九世紀ヨーロッパのよき日を思わせる都市であつた。

博物館、美術館の類もすいぶん見たが、整理の行き届いていること、教育的な狙いがかかりに明確になっていること、いつも相当多くの参観者がいることは印象的であつた。これはのちにみたヨーロッパ諸国のそれらも、みな共通にそうであつたが。さらに専門化した特殊博物館の多いことも、モスクワからヨーロッパに至る一般的な特色であつた。それにくらべると誰しもいうことだが、日本のそうした施設の貧しさがつくづく思われた。

コペルニクスの遺跡をたずねるポーランドの地方都市の旅も、ヨーロッパの都市の意味をいろいろと考えさせてくれた。そのあとブリュッセルから南下してローマ、フィレンツェからさらにイスタンブールと、ずいぶんあわただしい旅をつづけたけれども、はじめてのヨーロッパはやはりわたしには新鮮なものであつた。画集などでよく見馴れている絵画、彫刻の類も多く見たが、それらのどれもあらためてヨーロッパ文化の内容を検討させるものをふくんでいたのである。

けれどもちかごろよくいわれるヨーロッパの停滞は、ほと

んどわたしには考えられなかつた。ここでは十八世紀以来の科学も技術もみごとに共存する。それにひきかえ、わたしどもの世界はきれいさっぱりと十九世紀を追放してしまふ。しかしヨーロッパではすべてが彼ら自身の歴史として生きつづけている。近代以来の彼らの歴史は、実はそのまま科学と技術の歴史である。そのために、古くさくおくれたものに見える技術でも、実は彼らのネットワークの要素としてちゃんと生きているのだ。今日のヨーロッパの技術文明が停滞として見えること自身、わたしどもがなお科学や技術を自分自身の歴史のなかに、組みこみえないでいる証左なのではなからうか。

書いたもの一覽

一九七一年六月—一〇月

(五十音順、●印は単行本)

・会田雄次

政治行動は何も生み出さない
日本人の意識と行動

現代 六月号

貯蓄時報 九月号

・飛鳥井雅道

坂本龍馬(上・下)、勝海舟、北一輝他
脱から反へ

読売新聞 六月—七月

自動車とその世界 六月

有斐閣 七月

◎近代日本思想史の基礎知識(共著)
ロシア革命と日本への影響(菊地昌典氏と対談)

季刊社会思想 一巻二号 九月

・荒井 健

雑感

図書 二六二号 六月

・荒牧典俊

インド仏教から中国仏教へ——安般守意經と康僧会・道安・
謝敷序など——(未完)

仏教史学 一五号二号 一〇月

・飯沼二郎

生きがいと市民運動

俊成新聞 六月四日

◎日本農業技術論

未来社 七月

階級理論と市民原理

ベトナム通信 四二号 七月

オーストラリア紀行(上・下)

未来 七、八月号

戦後二六年の歩み

共同通信系各紙 八月中旬

「ベ平連」的なものとは何か

ベトナム通信 四三号 九月

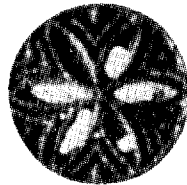
パートタイムの運動家——市民生活と市民運動——

ベトナム通信 四四号 一〇月

ことば

キリスト新聞 六月二六日、八月七日、

九月一八日、一〇月三〇日



・井上 清

中国にとってのニクソン訪中の意義

八・一五記念と日本人民

最近の日本映画における軍国主義

アジアアフリカ作家日本委員会パンフレット 一号 一〇月

沖繩差別とは何か

解放教育 四号 一〇月

・上山 春平

記紀のイデオロギー

女帝元明と藤原不比等

天皇家と藤原家

中央公論 増刊号 六月号

歴史と人物 九月号

歴史と人物 一〇月号

・内井 惣七

The Confirmation of Causal Laws, Ph. D. dissertation

Submitted to the University of Michigan. (Published in microfilm) Ann Arbor, Mich. : University

Microfilms, Inc. 八月

・梅 棹 忠夫

エスペラントと人類学 (2)

La Movadon-to 244 六月

怠惰価値の発見——労働観の変遷をめぐって——(対談・山崎正和)

山崎正和)

日本の都市1~4 (対談・川添登)

情報論の課題(シンポジウム) (加藤秀俊編・現代に生きる・情報環境からの挑戦)

文化分析の構想(再録) (加藤周一、久野収編・学問の思想)

日本人にとって戦後とは何か(座談会)

知られざる素顔の日本(対談・竹村健二)

住宅産業の盲点(座談会)

出口王仁三郎の人と芸術「羅盤」

日本は無思想時代の先兵(対談・司馬遼太郎・再録)(司馬遼太郎対談集・日本人を考える)

テグの講演会

大阪文化を考える(座談会)

序文——かい・きよみち著『やさしい情報整理学』

すいせん文——佐々木高明著『稲作以前』

都市の都市化とみどり(対談・吉村元男)

SPACE・MODULATOR 日本板硝子

◎論集・日本文化(共編) エッソ・スタンダード石油

就職指導 六月号

共同通信系各紙 六月

現代に生きる 六月

東洋経済新報社 六月

学問の思想 六月

筑摩書房 六月

諸君 七月号

潮 七月号

政治公論 八月号

講談社 八月

文芸春秋 八月

・愛宕 元

書評・中国中世史研究会編『中国中世史研究』

史林 五三卷六号 八月

・寛 文生

三過硬——公野草第三号を読んで

野草 四号 七月
書評・高田淳著『魯迅詩話』 野草 五号 一〇月

・川 勝義雄

司馬遷の歴史観（筑摩・世界文学大系 六卷 月報） 七月

道教と季節 エナジー 八卷三号 七月

・河野 健二

歴史のなかのヨーロッパ エコノミスト 七月六日号

社会思想の伝統と革新（Ⅰ） 朝日ゼミナール 七月二二日号

社会思想の伝統と革新（Ⅱ） 同 八月一八日号

歴史認識の科学性 思想 八月号

人文・社会科学と自然科学の調和について（報告『一九七〇年代

以降の科学・技術について』所収）

日本学術会議第五九回総会提出資料 一〇月

・熊倉 功夫

近世後期の茶の湯批判

茶湯 五号 六月

江戸幕府の朝廷支配と公家家業

詩林派瀕 一一号 七月

書評・村井康彦著『千利休』

芸能史研究 三四号 七月

近代茶の湯人脈史（一八～二二）

日本美術工芸 三九三～三九七号 六～一〇月

・阪上 孝

経済学批判とマルクス歴史理論の形成

思想 八月号

・島田 虔次

三十三年の夢（校訂、解説）（宮崎滔天全集 一卷）

平凡社 七月

清末民国初政治評論集（共訳編）（中国古典文学大系 五八卷）

平凡社 八月

・多田 道太郎

◎管理社会の影

読売新聞社 九月

Pan-urbanization and the Japanese People (Wheel

Extended, 71, Spring)

文学の中の美意識

朝日ゼミナール 六月

百科全書について（岩波文庫『百科全書』解説）

司馬遼太郎『歳月』（解説）（講談社文庫） 六月

衣更・ファッションの準拠枠について エナジー 七月

戦後ベスト・セラীর考察

出版研究 九月

物くさ太郎の空想力

ブッククラブ情報 九月

思想のことは

思想 一〇月

滝沢馬琴集(解説)(河出版・日本の古典)

一〇月

●論集・日本文化(共編)エッセ・スタンダード石油

一〇月

・磯波 護

書評・日野開三郎著『唐代邸店の研究』

東洋史研究 二九卷二・三号

書評・バラシユ著、村松祐次訳『中国文明と官僚制』

日本読書新聞 八月二日

・永田 英正

書体の変遷(中央公論社・書道芸術 三巻 月報)

七月

●中国古代文明(翻訳)

創元社 八月

・林 巳奈夫

殷周秦漢の造形文化(中国文化叢書 七巻)

八月

・林屋辰三郎

『中世の明暗』序説(京都市編・京都の歴史 二巻)

六月

折口先生と芸能史(中央公論社・折口信夫全集ノート編

五巻 月報)

六月

『舞曲扇林』とその背景

舞曲扇林

六月

「遊び」と芸能

テアトロ 九月

人間宗旦―『元伯宗旦文書』をめぐる―

茶道雑誌 一〇月

富士の芸術(西山英雄作品集・富士20)

一〇月

嵯峨野浄土(推古書院・嵯峨野)

一〇月

芸事とは(世界思想社・日本を知る事典)

一〇月

・樋口 謹一

●フオセール『社会主義契約論』(翻訳)

岩波書店 八月

選挙を考える

東京新聞 六月二四日夕刊

都市と人間―むらの親密さは都市に根づくか

毎日テラプレクチャー・ニューズ 一〇月二五日号

人間にとって国家とは何か(岡本清一、湯川秀樹、市川龜久弥、

梅原猛と座談会)

季刊創造の世界 三号 七月

書評・ダニエル・I・沖本著、山岡清二訳『仮面のアメリカ

人』

週刊言論 九月一〇日号

・日比野丈夫

河北省における集落と人口の分布(織田武雄先生退官記念

・人文地理学論叢)

柳原書店 六月

唐太宗・虞・欧・褚(解説)(書道芸術三巻)

中央公論社 七月

北京における定期市の変遷

史窓 二九号 八月

馬拉ッカのチャイニーズ・カピタンの系譜―補遺二則

東南アジア研究 九卷一号 八月

古銭(新版考古学講座 九卷一)

雄山閣 九月

那波先生の思い出

史窓 三〇号 一〇月

・平岡 武夫

四書索引について

四書索引内容見本 八月

・福永 光司

◎芸術論集(中国文明選一四卷)

朝日新聞社 九月

・藤枝 晃

コペンハーゲンの学生たち

以文 一四号 一〇月

◎文字の文化史

岩波書店 一〇月

・藤岡 喜愛

人類学的に見たバウムによるイメージの表現

季刊人類学 二卷三号 七月

・船越 昭生

マテオ・リッチ作成世界地図の中国に対する影響について

地図 九卷二号 六月

鎖国時代におけるペーリング探検の情報(織田武雄先生

退官記念・人文地理学論叢)

柳原書店 六月

・古屋 哲夫

終戦(日本と世界の歴史 一二二卷)

六月

ナショナリズム批判の原点

歴史学研究 一〇月号

・牧田 諦亮

道衍禪師の概き

禅文化 六二号 一〇月

・三宅 一郎

第七回統一地方選挙を終えて

労働調査時報 六月

政治行政データコレクション(一)

京都大学大型計算機センター広報 四卷八号 八月

政治行政データコレクション(二)

京都大学大型計算機センター広報 四卷一〇号 一〇月

・山田 慶児

百科全書的精神

図書 一六五号 九月

・吉田 光邦

野々村仁清(歴史の京都 五卷)

六月

呪性の蝶(日本の文様 七卷)

六月

The Japanese and the Cherry

Fashions 六月

優勢は劣勢(対談)

グラフィケーション 六月

イスラムの科学（アラビアの旅）

六月

中国古農書にみる植物

小原流揮花

六月

祇園会の山・鈴をめぐる

茶道雑誌

七月

神秘と実用と一扇の二面性（日本の文様 四巻）

七月

変化の流れ

京都インテリア 三号

八月

京漆器史目録（共編著）

京都市経済局

八月

日本観の形成過程

伝統と現代 九号

八月

鍊金・鍊丹術の視界

月刊百科 一〇号 九月

◎日本を知る事典（共編著）

社会思想社 一〇月

書評

エグゼクティブ 四〇九月

・渡部 徹

部落問題の本質と解放運動の理論

堺市教育委員会同和教育室 六月

人のうごき

松原正毅氏を助手（西洋部）に採用（十月一日付）。

藤枝晃教授は、ロンドン大学で開かれたアジア美術考古学討論

会出席のため、六月十七日東京空港発、七月十二日帰国。

吉田光邦助教授は、モスクワで開かれた第十三回科学史学会国

際会議出席のため、八月十七日東京空港発、九月二十日帰国。

内井惣七助手は、昭和四十五年八月二十五日よりミシガン大学

に留学し、八月五日帰国。

河野健二教授は、オーストリアのサン・タントンで開かれた第

八回国際経済学会出席のため、八月二十二日東京空港発、九

月十八日帰国。

山下正男助教授は、昭和四十五年八月八日よりハーバード・エ

ンチン研究所に留学し、十月十五日帰国。

梅棹忠夫教授は、スエーデン国スカンセン博物館等、民俗学・

民族学関係博物館の状況調査のため、十月十八日東京空港発、

十一月五日帰国。

前川和也助手は、論文「シュメールとミケーネ」によって第四

回流沙海西学会賞をおくられた。

人

文

第四号

昭和四六年二月二五日

京都大学人文科学研究所発行

明文舎印刷

非売品